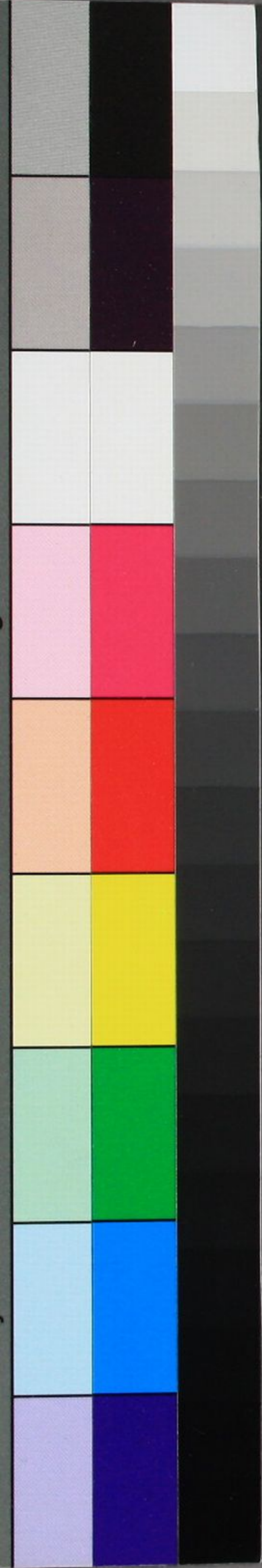
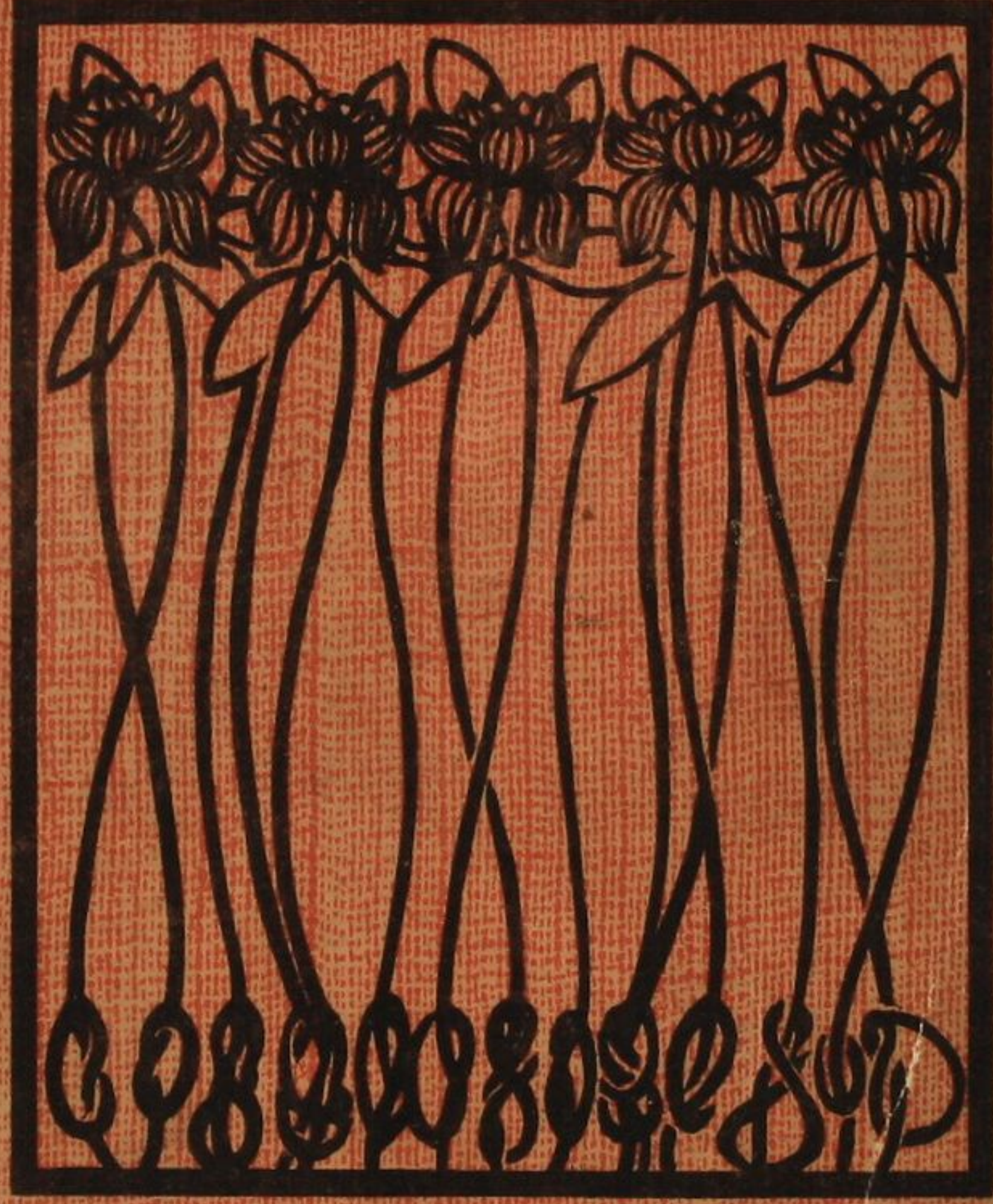


青海波

醉茗編





青海波

醉茗編







青

海

波

卷

一





青海波

河井醉茗編



### はしがき

世間未だ軍歌と新體詩の區別すら分らなかつた時分から『文庫』は新體詩に盡くす所があつて詩壇に於ける『文庫』の歴史は最も舊い。其舊き歴史を有する『文庫』の詩を、一部に纏めて世間に示さうとするのは、稍困難な事業で纏めずとも『文庫』で見れば分ると、今迄左様な企畫も思ひ立たなかつた。

然るに昨年末以來、詩壇に活氣を帯びて來た事は非常なもので、讀書社會全體が、新體詩の上にも多大の注意を置くやうになつた。随つて詩集の刊行も多く、此處に『文庫』詩集『青海波』の發刊を見るに至つた。

『青海波』一冊を以て直ちに『文庫』各人の詩を律するの少し無理であるが、全體の調子は是を以



て知ることが出来る。一人僅に一二篇を抜いた  
だけであるから、其人其人の特調は充分に分るま  
い、それは他日其人の集が世に公にされた時に、充  
分發揮せらるべく、『青海波』は只『文庫』大體の詩風  
を世間に示す迄である。

『青海波』分つて三篇となす『波がしら』の卷は最  
も新しい人の作、『海の香』の卷は四五年以來の人  
の作、『青うみ』は夜雨、清白等既に一家を成せる人  
と、『海の香』に收めたるより尙ほ舊き人の作、斯く  
區別をしたのも、自ら其處に詩風の異つた處が見  
えるからである。

『文庫』と自分との關係に就いて、昨冬紙上に發表  
した小言がある、左に轉載して聊か自分の志の存  
する處を示して置く。

宵の燈火を明るくして、机の上にうづ高く積んであ

る詩の原稿を一つく讀んで行く興味と云ふもの  
は、實に何物にも代へ難い趣がある。由來僕は理論を  
説く事が下手でもあるし、又好かぬので今迄『文庫』紙  
上、新體詩の議論は一度も發表した事は無い、又今後  
も恐らく少なからうと思ふ。併しながら不肯、『文庫』の詩  
を見初めてから約十ヶ年、優に一昔の閱歷を『文庫』詩  
壇に經來つた僕は、是が爲に多大の感情を僕の頭に  
印して居る。詩風の變遷、詩人の興廢、或る者は怒つて  
恨を吞んで居やうし、或る者は罵つて笑つて居やう  
し、或る者は退いて見て居やうし、或る者は絶えず作つ  
て居やうし、只些少でも『文庫』詩壇に上つた爲に其修養  
に益したと云ふ人があつたらば、僕は瞑するに足る  
ので、他方には又幾多の罪造りをしたであらうが、折  
があつたら記者懺悔をしたいと思いますと思つて居る位である。  
其間に僕は幾千篇の詩に接し、幾百人の詩人に接し  
たであらうが、藝術の人をひきつける力と云ふものは  
妙なもので、作詩家諸君が『文庫』へ出して見やうと  
云ふ氣になるのは、もう其處に或る一種の力が籠つ  
て居る、諸君と僕との間に何等の約束は無いけれど  
も、『文庫』へ出さうと云ふ事はもう既に諸君と僕との



間に或る約束が結ばれたので、讀んで僕が感動する、紙上へ出す、他の何千人の誌友が眼を通すと云ふ事になつて、其動機たるや、實に一種言ふ可らざる默契の間に存して居る。僕は決して諸君よりゐらいなどとは思つて居らぬ。所縁あつて、『文庫』の記者となり、毎月集つて來る多くの原稿の中から佳作を選抜して紙上へ出すのであるが、紙面の都合とか他欄との釣合と云ふものが無かつたならば、僕はより多く諸君を満足させたであらう。長篇も採録しやうし、印刷にも餘裕があらうし、多くの投稿家を網羅したであらう。由來『文庫』は一種の登龍門となつて居て、才力ある青年文士は一度此門を潜らねばならぬ事になつて居るやうで、一番、好い原稿の集るのは事實である、獨り詩のみではない、其他の創作皆然り、けれども詩だけに就いて云つても論より證據、『文庫』を一見すれば直ぐ分明する、是だけ多くの青年詩人を以て、築かれたる活氣ある詩壇は外にあるだらうか、之れ實に『文庫』の徳とする處で、而も隆々として詩壇は日に榮えて行く。けれども紙上に出来るのは實は月に依ると十分の一位なもので多くは僕の筐底に收めて了

ふ、誠に惜い事だ、出た作と出ない作との間に劃然たる塹壕の掘られてある譯でもなく、出さうと思つても紙面の都合で出なかつたり、全體はまづいが或る一節が非常に僕を感動せしめて新作家を優遇する事となつたり、出るにしろ出ないにしろ、作家と僕との關係は少しも變りがなく、又頗る神聖な純潔なものである。義理もなく、情實もなく、只胸に觸れる事の厚薄に依つて諸君との關係は益々深くなる。一度でも稿を寄せた人の名は僕の頭に残つて居る、況して始終寄送する人の名は能く覚えて居るので、あゝ今度はずまらないとか、うまく出來たとか讀んで行く中に其人の進境も歴々とわかるので、それが平素いつも、進まない人が、偶ま或るものに觸れて猛然筆を起し、勢ひ雲の走るやうな大作を寄せられた時の僕の感動と云ふものは、恐らく天女の影を見たよりの尚ほ高い歡びを以て心を動かすのである。秋漸く閑けんとす、栗の實落る手駄々谷のあたり、夜靜かにして誦しめてゆく、詩人の聲は、巧みなるも、稚きも皆それなく、小さき光を放ちて、玉の如き詩想を包んで居る、詩を作る人の里、詩を作る人の家、詩を作る



人の顔等を想ひ浮べ、今迄の例に照して思ひ當るな  
ど、我は我務めの高く潔きものあるに、自ら力の足ら  
ざるを愧づると共に、自ら慰むる事の多きを知り、星  
を仰いで世の少壯詩人が深く愛重せられんことを  
祈るのである。

六月一日

河井 醉 茗

(\*)







波かしら 目次

春	秘	春	菊	慧	思	風	花	白	逐	か	草	雛	靈	彼	朝	山	巢	兔	全	
曙	め	の	合	星	ひ	の	の	石	は	へ	の	鶏	は	は	顔	巢	籠	を	都	
歌	機	の	の	の	出	洞	幕	島	れ	り	の	守	山	山	鐘	る	巾	覺	醒	
怨	歌	貝	せ	歌	出	洞	幕	に	し	花	鞭	守	斧	在	賦	雀	ふ	賦	賦	
登	服	久	筒	藪	い	董	日	立	詩	花	原	内	樹	伊	鈴	石	澤	北	原	
阪	部	保	井	紫	さ	月	南	ち	人	元	田	海	屋	藤	木	井	村	原	白	
柳	補	白	葦	影	川	一	田	て	が	蘆	ゆ	信	秋	柴	裂	楚	胡	秋	秋	
暗	山	泉	坡	川	川	露	村	て	が	風	づ	之	風	泉	絃	江	夷	秋	秋	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
八	五	〇	八	五	三	〇	三	七	八	六	七	六	七	〇	三	三	〇	〇	一	一



鶴のをとリ……………宗石芝…三〇  
 山の男……………長田秀雄…三三  
 龍の歌……………星野李溪…三四  
 八重山櫻……………故中島鎮繪…三七

海の香

驛馬鬼鹿毛……………溝口白羊…一三三  
 磬の梯竹……………小牧暮潮…一五五  
 燭の火……………同 人…一五七  
 美しき謎……………東 草水…一六〇  
 秘め戀……………同 人…一六一  
 鴿……………窪田うづぼ…一六七  
 みじか夜……………水野葉舟…一七三  
 めじか……………緒方雁峰…一八一  
 海の幽黯……………大内白月…一八三  
 蝦蟇の歌……………碧 血 兒…一八八  
 毒蛇物語……………高田浩雲…一九三  
 靈櫻樹賦……………佐々木たつみ…二〇七  
 ともしび……………佐藤漱橋…二一一  
 山靈湖神……………内田茜江…二二三  
 鄙の手ぶ……………平井晩村…二三〇  
 森の泉……………小杉紫陽…二三六  
 野の夢……………平方曉聲…二四三

霜……………柱……………朝倉蘆鳴…二三四  
 花……………車……………長谷川春草…二三六  
 玉川……………砧……………藤波樂齋…二三八

青うみ

人故妻を逐はれて……………横瀬夜雨…二四四  
 我は疲れし旅人なり……………同 人…二五三  
 山岳雜詩……………伊良子清白…二五七  
 漂泊……………同 人…二七〇  
 まつよひ草……………木船和郷…二七三  
 野梅集……………葉末露子…二七八  
 夢のあとさき……………瀧澤秋曉…二八四  
 ゆく雲……………一色白浪…二八八  
 劍光……………久保田山百合…二九〇  
 沈鐘……………山崎紫紅…二九三  
 夏を懐ふ……………清水橘村…三〇二  
 湖上曲……………大倉桃郎…三〇四  
 落葉を掃ふ歌……………西川虹川…三〇三  
 追遙……………澤田東水…三〇六  
 雲の扉……………坂東自適…三〇七  
 篝火……………近藤野水…三一三  
 落日……………山内冬比古…三一四  
 木の花、草の花……………河井醉茗…三一六





波  
が  
し  
ら



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly characters.

Additional faint bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly characters.



全都覺醒賦

北原白秋

上

静かにすゝむ時の輪の  
軋つたへて幽かにも――  
白光、小鳥にゆるゝごと  
明日の香ゆらぐ夢の波  
薄むらさきにたゞよひて  
白帆はりゆく靈の舟  
まろらに薫る軟かぜの  
千里の潮の樂の音と  
人が息吹は力ある  
いのちの韻、永久に  
血の脈搏と大闇の



沈黙やぶりて響くまで――  
神澄みわたる雪の夜の  
聖さひと夜を神祕なる  
天の攝理と黙示との  
悟らるべく嚴かに  
書萬卷の慮をいで、  
雪に清しき頬をうたせ  
我、鶴筆のよそほひに  
鵝毛みだるゝ玉階を  
木々の白彩すりぬけて  
臺にのぼれば雲霽るゝ  
天は金沙の星月夜  
仰げば諸辰十二宮  
銀の瓔珞かゞやかに  
寶座を環る天宮の

靈彩高く、端嚴と  
華麗を盡くし眞無量  
善美まつたく整へば  
燦爛として聖天に満つ  
永劫の光明と歡樂に  
頌歌あふるゝ微妙じさと  
香華みだるゝ眩ばゆさに  
渴仰あつく跪づき  
涙のごひてさらにまた  
燃ゆる瞳をめぐらして  
闇に下界をうかゞへば  
廣量無邊、唯圓う  
包み繞らす雪絹の  
無縫の衣、水の帶  
無垢清淨のしろ銀の



袞白彩ひきかつぎ

譬へば、佛陀、無憂樹の

榮光の花ふる瑞かげに

蘇生淨化の果をひそめ

いま寂滅の落暉を

瑞雲くだる白蓮華

諸天諸菩薩比丘比丘尼

優婆夷優婆塞うちめぐる

蓮座に薫る大菩提

拈華微笑の尊とさに

しばし涅槃に入ることく

いと安らかに嚴かに

あゝ天が下、天雲の

そぎたつきはみ、壘なはる

青垣山の山脈の

むか伏すかぎり、八百潮の

潮の八百路の沖津波

邊にたつかぎり、秀つ國の

權威と光榮つかさどる

全都の偉靈二百萬

舉つて白日の戦闘の

その激甚と繁雜に

痛み傷つき倦み疲れ

闇にしばらく——白雪に

大傘かざし、深みどり

褪せず枯れざる驕慢に

白日、天の日あひしらひ

夕、月の輪貫きて

夜天の宿を支へつゝ

世の盛衰をひやゝかに



千歳の曆翻へし

神さびたてる常盤木の

古きにほひに佇みて

さらすかせば眼にくらさ

九百九町の静まりに

柳やなぎの家を守り

冷たう光る大路の灯

小路はくらし、病人の

夜の恐怖に血も冷えし

頬に沁み照る燭の灯か

小窓を洩れて青白う

一點二點さゆらげる

聴けば巽に、聖代の

新領かけて三千里

古海めぐる二千里の

闇の日の本、四方に見て

鎮護まします王城の

夜を警しむる衛兵が

番ふ言葉も震帯び

「休め」かしこし「寒し」

「さらば」の聲の時折に

さては安寧と平和に

市の夢守護る町々の

巡羅が警杖もねぶたげに

ひびく地心の骨凍り

かくていよ／＼更けゆけば

遙か、水澄む大川の

魚、氷に上るいきほひも

夜の大氣の寒冷に

輪波耳うちひびくほか



大地しづかにふしまるび  
一夜のなかに蘇る  
生存の氣と活動の  
大なる力、憧憬と  
希望の熱情、満ち足らふ  
夢に齎かせ、天ひびく  
高さ呼吸と音響と  
進めの律呂譜を納め  
たゞ聞として眠るかな

下

誇るべきかな、常闇に  
長き沈黙を壓したる  
権力を驕るほゝゑみに

いまはた、呼吸に世を回生す  
巨人のごともうなづきて  
我、鐘樓によぢのぼり  
夜は餘あり、とく醒めよ  
醒めよ休息に銳氣足る  
全都の靈よ、活動の  
一指に天を覆へす  
威勢しめせと大撞木  
闇にひと振、渾身の  
力をこめて鐘撞くや  
響殷々、澄みわたる  
大氣揺るがし亂るれば  
鳥は驚き友をよび  
綠天盖ゆるがして  
百千に亂れ、白銀の



箴背に負ふ神將が  
引番へ射る千束矢の  
白羽のごとく光射し  
紫雲たなびく九重の  
大宮めぐり鳴さかはし  
靄の御幕ひさかゝげ  
東をさせば、天津宮  
闇の夢戸を押ひらき  
いま目の神のいでましに  
光白駒、飛ぐるま  
萬の榮光、千々の彩  
百の照姫従へて  
しろ銀の輪の小軋に  
雲は彩湧く時を載せ  
まづほのしろむ黎明を

天に薄るゝ星くづの  
光の權者、靈清く  
地に蘇る音響の  
幽かにさらにひそやかに  
力こもりぬ、ほのくくと  
黎明の霧に動ぎつゝ  
九百九町はやはらかに  
醒むるよ。嘗て夜を高め  
天ゆくだせし洗禮の  
雪に五濁をそゝげばか  
六根清く品らかに  
離垢の法土を現ずるよ  
されば朝の氣朝の聲  
清くすゞしく爽やかに  
水に輪うち波をつたへ



山の鼓膜にひびくかな  
それ日の本は神ながら  
神つまります古國の  
秀眞の國の朝ぎよめ  
四方清しき宮霧に  
烏帽子、水干しら彩の  
禰宜が拍手、寒祝詞  
朗らかに澄むや神殿の  
大氣森たり朝神樂  
はや馨々とうちいづる  
時に聖は先覺の  
慈眼めぐらし數珠くりて  
滅ぶる子らに引導を  
死をまつ子らに教の光を  
傷める子らに慰籍を

康けき子らに平和を  
生るゝ子らに幸福を  
うつや鉦鼓の律幽に  
霧にむせびて三寶の  
清きほこりは雲に入り  
澄みて菩提をさそふべう  
伽藍の朝は磬の音に  
はた鐘の音におのづから  
清し淨土のかしこさを  
涙にあふぐ市びとが  
耳を過ぎりてあきなひの  
聲はさやかに、辻々の  
車の軋、鈴の音  
足駄、華靴、雪に鳴り  
繁く急忙しくなりゆけば



いまか市場は武蔵野の  
木の實、青物、北國の  
紅は林檎に、極熱の  
禾木、花くさ、花たまき  
彩に人よぶにぎはひに  
美し子らは入り亂れ  
朝眼清しくまどふらむ  
さては魚河岸舟つくや  
江戸は勇健の肌の文  
聲の勢ひか手に活ける  
魚の幾千、潑瀬と  
銀の鱗をひらめかし  
海の新香を飛ばすらむ  
かなた、朝汽車轟々と  
美しきゆめ若き夢

室は圓かに満つる夜の  
夢の二百里ひた走せに  
箱根足柄、曙の  
濃霧縫ひつゝ走りつゝ  
希望の都近づく  
百夢醒まし市びとが  
朝を警ましめ朗らかに  
寒天高くやゝ緩るく  
笛鳴らしつゝ迫るかな  
こなた、森なる樂堂の  
雪の門守、寝そびれし  
寢惚がほなる笑止さに  
門ぬけば夏海の  
高潮のごとひたよせて  
亂れ入る子の後ろかげ



ほの紅の霧透いて  
幸と希望に光る見よ  
と見る真紅は朝ぞらの  
雲を彩どり譜を染めて  
霧に流るゝ美しくしさ  
時いま、百の工場に  
輻輳の音うまれつゝ  
金は相槌ち石は鳴り  
熱火飛びちる活劇と  
大音響をもたらし  
黒烟のぼるよ笛鳴るよ  
けたたましくも凜として  
朝はいよ／＼新らしく  
生存は力をどよもして  
あゝ覚醒めゆく東の

覇國の都、かゞやかに  
天津御日繼いや高う  
かく天照らす皇統の  
天の御柱右ひだり  
いまし金簾緋とかゝげ  
百士百官めぐらして  
恩恵あまねく美はしく  
國見そなはす歡喜に  
霧は晴れたり、遠海の  
朝の青はや、眉せまる  
秩父遠山、筑波山  
富士、白雪のかんむりに  
玲瓏として玉のごと  
蒞むよ、朝のこの都  
あはれ不滅の精力に



歡喜あれよ幸福あれよ  
驕盛あれよ光榮あれよ  
いま悠々と高照り  
驕慢榮ゆる天日は  
時の白駒驅りすゝめ  
白銀の鞭、金の馬具  
輪車軋らす光道の  
十方かけて煌々と  
投ぐる金の矢銀の矢に  
赫々として輝りかへす  
朝の光に、千萬の  
薨高濤、金躍り  
銀さらめくや流るゝや  
日本晴の天の青  
涵たし盡くさむ勢に

大地大都は一犬の  
夢も許さず堂々と  
遂に醒めたり、憂然と  
いま噪然と轟然と  
あら蘇る活動の  
力、火となり熱となり  
電力となり、生類の  
血となり燃ゆる肉となり  
茲に全都の繁榮と  
高き權威を永久に  
人を圓滿にすゝむると  
千萬の聲、雜然と  
遂に溢れて漲りて  
天部貫ぬく激しさに  
あゝ地に匍匐る六尺の



短軀にひそむ精力の  
偉大不滅をまさに見る  
高堂の朝、樹下の人  
あゝ眼にあまる驚駭に  
讚嘆高く青春の  
血潮熱搏つ兩腕を舞と  
感涙せちにうちむせぶかな

兎を弔ふ歌

兎は見えず

澤村胡夷

(〇二)

雨一しさり、夜はあけぬ  
薫ずる香、地に重う  
九里香の花こぼれ散る  
御影石さびたる石燈籠

陰ほのぐらく濕氣にけり

庭、人香なき朝な  
くづれし垣をかいくぐり  
飛び來、小鳥の名は知らず  
ひそかに人の覗ふを  
恐れもなげに今朝もまた

羽鼓き軽く苔の上に  
何驚ける消魂しう  
下枝の風にちゝと鳴き  
枝又枝をかいぬけて  
葉かけ安しと隠れたり

石燈籠の彼方には

(一)



事あるらしと思へども  
面なめらなる黒壁に  
身は想像の羽に乗り  
もたるゝ朝の習慣なれば

運ぶ草履のかるやかに  
跽音せはしくそびらより  
兄よと叫びのたゞならぬ  
ふと見かへれば弟の  
眼、つぶらに打仰ぐ

祭日の夕、酔ひ癡れて  
納屋の戸、閉つを忘れけり  
まき、一束の失なきも  
兎は見えずこのあした

罪は下部の額に落つ

### 懈怠の夢

朝ぎよめするみやつこが  
刻たがへたる鈍に似て  
庭の戸、くゞりかけよるや  
あわてゝ下部九里香の  
葉かけおちくゝ指示すよ

夢を催す花の香の  
とけし滴、身にしめて  
動きもやらず雌兎は  
甘さねむりに耽るらむ  
起きよと風の毛にそよぐ



來と手招かば主公知る

兎は裾に飛びこむを

新鮮し菜採りなげやれど

動かず、飛ばず、したひ來ず

懈怠の夢に、何、ふける

迫害

血はあたゝかきわが指に

をのゝく和毛、さとふれて

ひめがき越えて閃くを

そもめぐらざる冷えし血の

こは力なきむくろ哉

澁き茶すゝる老者にも

青春、語れと迫りなば

ゆらぐむねの血、覺えむに

今、たふれふすめうさぎは

さばしる血汐、胸に閉づ

頸をとりしわが指を

いつしかぬけて尸は

再びくらき蔭にふし

わが手にじゞむ紅の

こは、そも、血潮、毛もまじる

噛みしはいたち、闇にして

てむかふすべもあらなくに

か弱き兎よわり行く



血の氣、吸はるゝ悶絶の  
ああ、くるしみの其聲や

瞑 想

いま濕りたる苔石の  
青きが上に横はる  
血潮かれにしめうさぎの  
冷えたるかばね打ながめ  
しばし沈想にふけりゆく  
聖僧、深き堂に入り  
みあかし揺るゝそのもとに  
尊き御名を誦する時  
低うたなびく紫の

煙、薰ずる夕ぐれや

晩鐘ゆるく野をこえて  
寂黙令ずる崇嚴の  
調を市に送る時  
ああ、ひとり行く旅の子の  
死のさびしらを觀ぜずや

兎は死にぬ。あさまだき  
まひる陽あびてまどろめる  
姿に似たり。苔の上に  
白く吹かるゝ呼吸もなう  
めぐる血潮もつきけらし  
めぐる血にこそ、魂やどれ



生命の泉、底つきて  
夕べ流るゝ雲にのり  
遠くゆかむは幸なれど  
迫害うけし小さき魂の  
さて、そも、いづく、さまよへる

永久の床

眠れ、たゞ

永久に

三尺の

土掘りて

汝が『とはの

床』なりぬ

房と枝垂るゝ蜜柑の樹  
葉かげに永久の床なりぬ  
今、おごそかの葬りに  
弟、かなしくうなだれて

あつき涙をそゝぐ哉

土、やはらかき三尺の  
とこに眠れる雌兎よ  
さびしからば可美實の  
黄金の色の淡く濃く  
みかんを汝が宿とせよ

霜、ま白なる天地に

こがね光澤あるうましみの  
暮れゆく秋のさびしらを  
わが庭にしもかざらむか  
かなしき人もよしと見む

大地うごめくものゝ上に



柔和なる魂、宿らざれ  
もし冷えゆける冬の日  
石とこほらば如何にせむ  
さて、やはらかき土塊を  
取りてそゝげば言はぬ  
眞白きむくろかき消えて  
風、蕭條と双袖に  
秋ふけぬらし萩の壺

巢籠る雲雀

石井楚江

朝雨晴れて日にほふ  
穂麥の緑、草の香や  
町への路をゆくりなく  
葉蔭雲雀の巢を見つる

母屋に近う朝夕  
空に漾ふ魂の如  
ひゞらぐ聲の流れては  
歡樂胸に傳へけん

泥土のしめり、畔の館  
見れば巢籠る二方の  
圓き頸を片よせて  
産毛やさしき雲雀の子

揺ぐともなき草の風  
露ほろくくと巢に入れば  
可憐やちくとさゝ啼いて  
柔背に細き日光を浴ぶる



春陽饒かに潤へる  
野の平和を巢に占めて  
春に生れし皇子なれば  
天稟の柔和は自ら

かくて生長健かに  
光に羽搏つ朝明や  
瞳をかへす野邊山邊  
あゝ言祝に輝かん

嘗て若い娘耕やすと  
金こぼるゝ菜花畠の  
花かげ雛を巢に見出で  
やさしや鉞を捨てしとか

今吾袖に寄り沿ひて  
怖づるが如き妹の  
瞳に含む光輝よ  
私語さへも憚りぬ

ふと虚空より落ち來る  
親か雲雀の啼く聲に  
何に慍えし二歩三步  
退くや胸もときめきて

仰げば風はさら／＼と  
春の韻は漲りて  
影ありとしも覺えねど  
しきりに啼けり巢の雲雀



山彦

小牧林鐘

海と山

尾の上の松の白雲を  
旗差しものと戴きて  
茅原萱原長さ穂に  
波をうたする山の勢

白鬣の磯波を

我が先陣と押しよせて  
見渡すかぎりひし／＼と  
衝き進みくる海の勢

風吹きおろし山の勢

喊をあぐれば海の勢  
どよみて之に答へつゝ  
戦とはに鳴り止まず

あなまだるしと山の勢  
崖石あまた投げ落せば  
まだ負けずやと海の勢  
巖を噛みて進み来る

山、海勢を破り得ず  
海、山勢を降し得ず  
関をあげつゝ答へつゝ  
永久に戦ふ海と山

登山



登りて登る山幾重

先きに高しと思ひしも

今は遙かの下にして

低く沈みて地を這へり

登りて登る山幾重

次第に地圖を擴げゆく

前なる山の肩越しに

鏡を開く遠つ海

登りて登る山幾重

橋や田畑や村里や

我指一つ動かさば

壞れも果てん影小さう

登りて登る山幾重

登り登れど山幾重

仰げば高き神の座の

険しき峯を雲渡る

登り登れど山幾重

高き砦の山々は

かの白日に照らされて

巨人の如く横はる

登り登れど山幾重

山々肩を聳やかし

かゝる聖地に塵の子を

いかで容れんと威を示すかな



山上

藪陰坂路幾曲り

やうくにして藪を出て

茅萱亂るゝ山の上に

四邊の景色眺むれば

周囲の山の懐に

いと暖かく抱かれて

屋根を並ぶる谷の村

繪のごと小さく目にうつる

聲に始めて振りかへる

あなたの山の山半ば

薪切るとや二三人

小さく動くも見ゆる哉

人無き山の寂として

ひびき途絶えし眞晝時

數歩の前をかさくと

枯萱ゆするものや何

あまりに山の寂たれば

響を高く餌をあさる

鼯可愛ゆき歩み振り

動かず守る小半時

人の足音に振りむけば

かさばる萱を背に負うて



石塊多き山みちを  
覺束なげに降りゆく

見れば岫の影も無く  
赤き草の實見えがくれ  
仰げば高し天の海  
岫より岫を雲渡る

山 火

誰が捨て置きし罪の火ぞ  
草より草にうつりゆき  
飛ぶ風の背にのせられて  
瞬くひまに擴ごりぬ

もとより草の山にして  
遮るものもあらざれば  
火軍忽ち時を得て  
山を包みて皆火也

左右の谷の村の人  
出でて戸に倚り仰ぎ見て  
あれよくと呼ばはれど  
手に及ばねば守るのみ

夕とならば雲の臺  
雨の後には虹の座の  
山は見る見る火となりて  
煙尾を曳く空の末



日頃歸依する拜殿の  
空しく焼くる思ひにて  
心寂しき村人は  
繪のごと小さく目にうつる

朝顔鐘賦

鈴木裂絃

秋立つ朝の逍遙に  
國主の廟にたましひの  
さそはれ心地露ふみて  
行けばさすらひたゞ獨り  
小萩の下枝吹く風の  
庭、敷つめし砂に落ち  
箒目清く繪の如し  
閉す扉の銀鉾や

浮彫、御紋いかめしく  
住みしらぬ世にみやびたる  
君のきほひのおもはるゝ

鐘樓に残る釣鐘は  
響廢たれて二百年  
濃緑浮ぶ銘の文字  
形朝顔優なるが  
五つに分る葩の  
しづかに下に開きたり

くしび燃ゆてふ筑紫の海  
時にとさめく城主の  
優しき戀の物語り  
猿が叫ぶ美作の



國主の君の獨り姫  
戀ふとの傳へ響かせよ  
名だゝる工匠選ばせて  
濱の春の日吉日よきひえり  
潮交りたり泡沫うたかたの  
海の遠音の籠りつゝ  
鑄あげしものよ釣鐘は

春や昔の高樓に  
琴きん弾く和手に撞かれては  
袖のさくらの風に散り  
いと艶にほやかに徐ゆるやかに  
二打三打若草の  
萌黄は烟る風は揺る

響に耳を澄しては  
蓬萊山の物語り  
童女が夢に導かれ  
龍宮に貝拾ふ如  
少女はつねに微笑まむ  
戀知りそめし若き子は  
脈の高打ち覺えつゝ  
反響ひびきが誘ふ紫の  
山の木精にみちびかれ  
こゝろそゞろに山に谷  
谷より谷に傳ひゆき  
霞の奥の深くして  
鐘の餘韻を收むれば  
落花も土に音のして  
靈に感ずる花の精



あゝ、山國の深緑  
聚るところ雲籠る  
山より高き白塗りの  
天主の跡は草ふかに  
狐狸が槍たてゝ  
白晝遊ぶにまかせたり  
爰は代を續ぐ城主の  
額づきて來し靈廟  
玉垣のうち門のうち  
竹刀に勇みて眉あげし  
老いし番者は國家老  
家寶護るに怠らず  
勳功の鎧、朱の甲  
鐘は戀路の使者なり

人香絶えたる寂寞の  
三更走る流れ星  
南極の海に落つるとき  
海なき國のかげにして  
潮のさす音傳へつゝ  
冷えたる鐘の夢に醒め  
天の氣象にともなひて  
響自然とあるときは  
九十九の翁杖ふりて  
世に若がへる思ひすと  
忘れし人を訪ねゆき  
城跡の松に吹く風の  
昔の夢にあこがるゝ



或日少女子夢に立ち  
祖父來告ぐと鐘にゆき  
あこがれ心地現なく  
狂ふと人の嘲けれど  
默示の謎を解き去りて  
歸るや笑みの美しくしき  
さながら精神こもりたる  
畫工の彩筆を脱け出で、  
少女の容貌は秀でたり  
塵にそみたる名所の  
道の標は苔に朽ち  
南と北を誤れど  
緑青色さび朝顔の

花の氣韻は消えやらず  
今物靈しき鐘の影  
秋の光に土に滲み  
人語らざる萬象の  
なさけを暫し記したるかな

自註、鐘は美作國鶴山城麓愛山廟にあり

彼は山に在り

伊東柴泉

擅なる子にあれば  
天なる駒に鞭うちて  
雲に馳ぬと謠はれし  
即ち彼は山に在り

景ある所、天蓋の  
紫、花が瑠璃の蔭



彼の子、巖の室むろにして  
人の地を抜く二千丈

靈山なれば振鈴の  
音ねとも響いて鳥の聲  
行く雲さへも止まりて  
夢靜かなる對山の  
松の嵐にこたへつゝ

若し夫れ天の興湧くや  
月に沈める千仞の  
瀧たきに走つて百集もつどふ  
龍の眼を驚かす

或は虹の氣を吐いて

神祕かしこき莊嚴の  
靈樹玉樹を顛はして  
雷聲らいせい快と叫ぶかな

\* \* \* \* \*

我今、爰こゝに斯る世に  
斯る彼の子を生じたる  
くしき天意を偲しのびては  
そぞろに落る涙かな

彼やいくとせ靈腕に  
天の彩卷あまきまき編ぬれど  
黄金こがねに盲くらし市人が  
瞳ひとみに聖畫せいが値たせず



慰みもなきかゝる世に  
せめてと戀に生しかど  
胸の香餘り高うして  
戀悉く輕かりし

紫、殊に紅の  
繪の具は人を狂に導て  
生物忌みてとほざくる  
疾風の如く彼なりぬ

況んや彼は奔放の  
情、偽らず憚らず  
惶ず惑はず躊躇ず  
天馬の如く振舞ひぬ

愚かや市の小人が  
鞭を以て道をもて  
彼と彼の筆折らんとす  
毒蛇、神の光おちて  
人の白日を呪ふに似たり

敷くしら露は甘くあれ  
咲く百花は聖くあれ  
野の子となりて  
しばぶえを

吹くべく餘り  
熱かりき——  
深山に行かば  
千よろづの  
美少くはし女



ありといふ  
それ宜<sup>よか</sup>らめと

ふるさとを

飄然蹴つて

雲と行く旅

\*

\*

\*

\*

\*

口碑は語り傳へらく――

或る天上に姫のあり

美し姿、母に似て

戀の血の氣を父に受け

その星眸に映りては

異彩類なき金殿も

「罪の祕藏」と捨てられぬ――

爛の羽のかろきまゝ

雲の疾風<sup>はやち</sup>に打ち乗りて

ふと美き人の世の

ちいさき山を認めけり

ほゝゑみつきず去りもやらず

あれよくと天人が

犇めく中に集ふ中に

夢、二萬歳永へに

山に潜みて顯<sup>ひか</sup>ずてふ――

其の山水を得て生くる

麓の里の少女等は

奇ッ怪、常に戀病<sup>べいび</sup>と

奇蹟の節を野に知りて

彼の子は山に登りけり

巨岩<sup>いば</sup>有り山の奥深う

薔薇白百合、紅白の



環は環を綴り香を亂し  
美妙の寶座、幻まぼろしの座ざに  
燦爛として瞳射る  
犠け牲せとなりたる姫君の  
魔の性火の性刻まれて  
巨靈不斷に浮うれ出で  
美よき子と見れば誘ひて  
怪しの情を授くとぞ  
誰か知る可き其の岩に  
人の彼の子のあるありと  
\* \* \* \* \*  
ほしいまゝなる  
子にしあれば  
かの白駒しろこまに  
むちうちて

雲に馳せぬと  
うたはれし  
彼は即ち  
山に在り――

靈 斧

榊屋秋風

あかとき、春の山に入る  
杣人、若年なりけれど  
面は嵐に慣れたれば  
眼、りゝしく生氣あり  
木の間をもるゝ東の  
しらしら明けをあてにして  
たどる徑はいくまがり  
草鞋は草に埋れつゝ



三千年の生を得し  
樟の大樹は葉をゆすり  
領を犯すはしれものと  
こだま鳴らして怒るごと

父が記念に遺したる  
ゆゝしき鍛冶の名と靈と  
刻める斧をとりなほし  
一揮り揮つて、驚かす

況や山を司る  
大山祇のおん神を  
齋祭りて山に入る  
ゆるしを得たる樵夫なり

深くも分くる遅櫻  
とゞろの瀧を掬びつゝ  
残んの霧を吹き拂ひ  
姿は遠くかくれたり

眞鐵の筋やきたへたる  
金剛不壞の腕より  
起る響は伐木の  
丁々々とゆるやかに

鳥の音、時に相和して  
とゞまる雲もゆく雲も  
悠々として深山に  
太古の春の長閑なる



雛鶏守

内海信之

晝ひねもすを伏籠ふせかごの  
せまきが中の牢獄ひとやずみ  
哀れと思ひ日ぐれごろ  
苑そのにはなちて遊ばすに

小ちさきものからともすれば  
餌食みじきにせんと野良犬や  
鳥からす、鶯うぐいらのねらふにぞ  
油断ゆだんならじとこの日頃

(なすこともなく身弱みよわなる  
わがなすわざに適よさへりと  
暫しばしは詩人夕ごとを

雛鶏守をつとめけり

小田に鋏きりばしうつ時にすら  
書よ、懐ふところにひそませつ  
いこへば畦あぜの草の上に  
詩うたをし思ふ我なれば

雛鶏守となりぬれど  
さすがに性さがは矯ためられず  
時刻ときとしなれば書架かよりぞ  
抽ぬき出てづるが常にして

○

心許ゆるして詩集うたふみに



見とれし隙をふとみれば  
日頃愛で培ふ草花を  
あな無風流や啄むに

ふと気づきたり叱とばかり  
双手をあげて追ふとして  
あやまり書をととり落し  
微風にひらめく白紙や

驚く雛は一叫び  
羽ばたきなしてちり退くに  
鶴首四顧みつ母鶏は  
あやしき聲になきたつるよ

○

春雨いとゞ静かにて  
降りそゞげども音もなく  
紅芍薬の花の上の  
しづくもかをる夕まぐれ

母鶏嘴に葉をくはへ  
莖ゆるがせばその下に  
つどひて何かついはめる  
雛の柔背に露ちりて

花瓣三つ四つこぼれたり  
沁みては白き羽の色  
淡紅に染まずやと  
濡るゝながめて獨り惑ひぬ



○  
彼方かなたにこゝに各がじゝ  
草根つゝきつ土ほりつ  
浮世に人のいとなみか  
餌をひろひて遊びしが

何なにに驚おどえけん母鶏ははどりの

いましめ告ぐる一聲に  
すはと小さき瞳めを見はり  
耳そばだつるをかしさや

○  
時をあたかも汝を守る  
若人わかひと讀むはバイブルよ

垂髪たながみの豫言者よげんしやユダの野の  
叫びに民のさめしに似たる

○

青あをもえ出でし夏草は  
雨にうるほひいや青し  
その芽つ**い**ばむ雞けいの  
白しろさ**和**毛わげと彩色あやなして

○

人にたとへば成丁せいていが  
獨り立たんひとりたにたへめとて  
今日より母を引はなち



同胞のみとなしにけり

食むも寝るもこれまでは

皆母どりによりにしを

頼みなからん朝夕を

思へばいとあはれなれど

○

今日も雛鶏守、小花白き

蜜柑の木陰地足がきつゝ

小さき嘴に土ほりつ

さゝめき餌をあさる間を

傍への枯梅にもたれより

春の夕日を背にあびて

心のどかに暖かく

ハイネの詩に読みふける

誦す我が聲もふるふまで

つよき哀情をつたへては

涙こぼるゝそのはてを

面をおほうて我泣きぬ

ぬれし詩巻再讀まず

小草をぬきてさしはさみ

かりの菜と、たゝみとぢて

そと懐にをさめ入れ

仰げば西に日は落ちて



名残もいつかたそがれぬ  
星まだ出でぬ大空に  
一すぢあはき雲のかけ

落つる夕の色とよもに  
愁ひのかけはせまりきて  
胸をおほへば心くらく  
闇はあたりにもたんとす

空想の翼のたゞかろく  
はするとすれど現身に  
心臓のゆらぎなほたえず  
かへるや魂の苦しさに

我が冥想は知らずして

たゞたのしげのそがさまよ  
鶏と生れし汝はしも  
幸か不幸か我しらじ

やがてなげきの運命負ひて  
何しに卵より孵へりけん  
せめて暫しは嬉々として  
幼な夢よ安かれな

○

常磐木しげる陰にして  
小き草蟲掌にのせて  
雛の前にとざし出せば  
争ひよりてついでみぬ



幾日を我に馴れ／＼て  
恐れず傍により來なる  
なぐさめもなき我も亦  
書よみあけば友となしつゝ

○

春日虚空に輪をゑがく  
鳶よ姿はのどかなれど  
鋭き眼は爛と地を瞰下し  
餌物たづぬる恐ろしさ

暮光もりくるみどり陰  
戀ものがたり興に入り

歌に心をうばはれて  
垂首書に見惚る時

飄忽低く／＼だりきて  
抄はんとしぬ、たゞならぬ  
恐れの声のけたましく  
仇來とさとり逃げまどふ

大聲あげて我しらず  
立ち追へば又空高く  
そしらぬけはひ羽ゆるく  
悠々たるも憎々し

下界のさわぎ見おろして  
よも得來まじとほこるごと



あたり舞へるもしばしにて  
いづこともなく去りにけり

胸やさわぎしかくれ入りし  
彼方此方の物かげより  
おそるくくに立ち出でて  
昏耗しごとき雛のさま

○

雛も自然に長じては  
仇もうれひもたえにけり  
守のつとめはうすらぎて  
いつとはなしに解職れたり

### 草の鞭

原田ゆづる

狐が恐い花の夜の  
西家につゞく麓路を  
叔母に送られちゞくまり  
妹は湯より歸りけり

灯火明き兄に来て  
跟くものもなしと後を顧る  
母の言葉をその儘に  
茅萱で切つた眼を細う

草臥ごちたよくと  
膝にくづるゝ温かさ  
桃色結ぶ三尺は



ばらりと背にこぼれたり

最うすや／＼と眠りたる

祭晴衣の兩袖に

手あたりぬぐふ草花のなへ

土筆だらりと首なげて

青野の村の花祭り

狩衣、菜種の牛若や

蓮華草を鎧ふ武藏坊

花車くさ／＼の花精や來よ

さくら下道、枝の灯の

おぼろに映ゆる顔の色

母を笑ひつ笑はれつ

飴屋が笛に誘はれて

そゞろ路急く蹉躓に

やさしき夢よはぐるゝな

土筆も生きてをどりやれ

春の夜、袈裟は打やりて

京人形をさながらに

容貌清らの子ならねど

夢美き寝顔にこやかに

妹可愛き今宵かな

野の家に稚兒が夢守の

鞭としいへど草のむち

揮ふ要なき静けさを

壘は青き香にゆるく



かへり花(獨詩より)

秋元蘆風

慰籍の涙

「よろこび満つる此ごろを  
何なににうれひの君ならん  
君が眼まなこをうち見れば  
涙の痕あとぞしのぼるゝ一

「胸のなやみにえ堪へねば  
われは涙にくれしなり  
涙のかぎり泣きてこそ  
胸は和やはらぐ心地こゝちすれ」

「友ほゝゑみて君待つに  
來りて友が胸に頼よれ

失へるものそも何ぞ  
心の底を語らずや」

「よろこび狂ふわが友よ  
君は知らじなわがなやみ  
かなはぬ戀のありといへど  
失へるにはあらずかし」

「さはわれ君を勵わかまさん  
胸の血熱わかき若人わかよ  
強き力を持てる身ぞ  
勇みて目的まに進む身ぞ」

「願かなはぬわが身ぞよ  
あまりに遠きそれなれば



清き光にかゝやける  
高きみそらの星に似て」

「高きみそらの星なれば

光のみこそ人慕へ

あこがれごとち夜なくくの

清き影こそ人仰げ」

「あくがれごとち幾日かを

みそら戀しく仰ぎけん

せめて幾夜をなぐさめに

涙のかぎり泣かしめよ」

——ゲーテ。

オレンヂの花に寄する歌

あなあはれ南土の花よ

寒き郷に何をか憂ふ

われもまた異郷に住む身

胸に満つおもひくるしみ

うらぶれのわれらが身こそ

わびてのみ此の世を過ごせ

ふる郷の神のめぐみを

誰かまたこゝに享くべきや

やさしげの香をな放ちそ

かぐはしのうてなを閉ぢよ

かくて汝がたふとき生命

いたづらに異郷に捨つな



しづかなる天が下には  
やさ歌の湧きでし小琴  
音も妙に響きしそれも  
さわがしの世に黙しぬる

あたゝかき光照る郷  
そこに汝またも芳はめ  
しづかさの領ずる所  
そこに我またも歌はめ

いたましの惱みのために  
斃るとも萎れはつとも  
堪へ難き胸のねがひを  
あゝ吾は遂げずばやまじ

—シエンクン、ドルフ。

追はれし詩人が

人見東村

玳瑁むらがる南洋に  
金鼓どよめく音とひびき  
くろ潮めぐれる孤島にして  
誰ぞ、枯木焚いて椰子實喰ふは

かた凝り信ずる天織の  
瑞華、秀眞の宮の扉を  
手拂ひ入らんと、ひとたびは  
救世の鐸鈴、天韻を

黙示断へにし空洞にて  
魔相、陰沼に夢ごこち



戸惑ひ闇行く有象無象  
熱情の歌をあたへんと

かの國の眼識狭少して  
照る目を恐るる惡鳥が  
白晝の氣色を呪ふやう  
怨んじて天華に千箭ひく

聖殿靈座は永劫に  
藝術の精華こそ占むべきを  
破壊の斧こそ下りけれ  
巨像の光あせぬらむ

稱賛るは頌歌榮ゆべきは  
王者が樓閣の金廉に

銀燭ささぐる似而非詩人が  
眼にきらびやかか賦にしあれば

天蓋傾しげし神將が  
伸羽啼りて天翔ける  
駿馬ときほふ警策の  
なでふ賤き國に許容ん

好哉詩の名をいつはりて  
秀の國さまを騒がする  
汝の奸曲黠人  
皇土に住まうをゆるさじと

毒ある宴に酔ひくづれて  
執着酒盃を啣みつる  
魂抜けの大臣等が



をこか、追放の宣告あり

ああよし呵責るに繫縛の  
黒鐵の鎖に腕をまかれ  
囹圄のしもとに斃るとも  
この『信仰』を換ゆべきや

爛く聖燭とこしへに  
魔の羽にまかれ消えしかば  
わが清領はや亡びぬと  
白眼、祖國の岸去らむ

國を追はれにし詩人が  
流離の憂にむすぼれて  
愛さ垂乳根しぬびつ

海上、帆柱を抱くかな

望めば迢けき、八汐路の  
北へ流るる二千里や  
父母同胞の岸さりて  
ああなど誰か手を垂れざる

流罪吾が来て守る島は  
地軸の鼓膜を磐石を  
どよもす激浪暗卵の  
氣うとき海の孤島かな

一氣に大地の精凝りて  
靈能に生れし島なれば  
不壞の深妙耀きて



無窮の天韻ただよひぬ

無人の境時間知らず

樹林に斧を撃たざれば

天そそり立つ雄大の

萬象の胸に育くみて

椰子の林に唸聲する

獸の蹙音も聞きなれて

朝は高嶺をさまよひつ

夕深き谷に泊るかな

「さば吾は天地の覇者にして

自然は己れの律呂なりと」

氣魄胸を衝く感興は

ああ大天地を呑み去んぬ

椰子の朽黄葉を焚き火して  
木陰、草居の夕まぐれ  
手に落つ涙の熱さをば  
ああまた誰か憐まむ

### 白石島に立ちて

西尾桐里

島は但馬、城崎郡、香住村沖にあり島内に  
一小社あり

底、ものすごき北海の  
物狂ほしき中にして  
韻高しや、白石の  
島はゆたかに横はる

神座あるをも憚らず



遠、ひし／＼と寄せ來ては  
周圍五町を取りかこみ  
汀に攀づる波の勢

こは狂態の大岩の  
肩そびやかし、肘を張り  
大聲あげて叱咤しつ  
微塵になれと打ち返す

打ちかへせどもかへせども  
波には波の後詰あり  
うたれし先の波をこえ  
後なる波はよせきたる  
かくてはげしく闘ふに

波、些の地も侵し得ず  
岩は碎けず身じろがず  
胸の強さを誇る哉

敗れじ、退かじ、動かじの  
氣魂ぞかたく凝りつらむ  
見よ、露出なる強肌は  
薄手少しも負はぬなり

そも／＼神に使命受けて  
さて、靈能を得たりけん  
壯なるかな、荒岩の  
島を衛りの装ひよ

されば白樫、黒松の



威ある神木とこしへに  
島の平和をたゝへつゝ  
寒にも枯れず、暑に萎えず

葉振り、枝振り一々に

神の匠のまゝなれや

靈妙たか聖き幽韻の

深くこもりて見ゆるかな

羽をやすむる鳥もなく

毛の物ゆ彷彿さし痕たえて

つくろはぬ草香あり

花とも見えぬ花にして

下、さまよへば自ら

太古の人の思ひかな

肅寂として壯嚴の

靈氣は海を壓したり

北、荒涼の府を出て、

海を煽つてよせきたる

身を鍛へたる風にして

翼折られてはなだれ行く

續くは、先鋒さきに疾風の

堂々、陣をたてなほし

どつと叫喚おといてよせきしが

また破られて黙しけり

それ數百の齡得て



尙若々と萌ゆる芽の  
嗟見よ、既に其意氣は  
天を衝けるにあらざるや

あゝ仰ぎ見る靈島の  
神木の叢、岩の砦  
偉なるかな、風と波の  
無限の勢力を破りつゝ  
永久、亡びじの勢には  
島、ひらけたる太古より  
神領の威はおとろへず  
靈座ぞとはにかはらざる

## 花の幕

日南田村人

花見

花一山に打たしたる  
紅白染の幕撫で、  
吹くや春風あたゝかに  
絲屋一家の花見哉

主人自ら柄子とり  
すゝむる酒の頬に出で、  
乳母のお染が三味の音に  
番頭久兵衛立つて舞ふ  
撃つや小鼓皿つゞみ



満座どよめく亂調の  
お猿に似たる面吹いて  
又一陣の花ふゞき

櫻の渡し

美しく波にゆら／＼と  
書く、漣、影、姿  
繪日傘一人繪師一人  
櫻の渡し、春の暮

櫻宵月

紅梅被衣、緋の被衣  
忍び／＼に京の町

花をかざせる姫君に

玉苗とるや小公達

櫻宵月、おぼろ／＼

花の伊達衆にまぎれ入りて  
笑み美しくしうはづかしう  
また別れけり會ひにけり

七惠比子

花のさゞめきさてあやし  
春の夜えものおつ取りて  
櫃、ひそかに窺へば  
繪に見しやうな面白の



辨天舞へば布袋はやし  
目出度くくの酒宴や  
各、花にねころんで  
七笑みおはす七恵比子

春の夜

被衣、雪洞、廻廊の  
花のふいきにまかせ置き  
妻戸そと繰り、けしからぬ  
少將いづこへ落ちけらし

絲屋の娘

紅屋にとなる雛屋の

雛に見とれてたゞずむは  
京の絲屋の二の娘  
此の春、えにし結ばれて  
春の灯影に頬を染めて  
笑靨姿のいぢらしや  
花のかへりの遅いとて  
また阿母さんにしからるゝぞへ

夜 櫻

狐、美女と變化して  
笛の子花に招くごと  
畔に立つたる一本の  
緋櫻ことにあでやかに



春の大氣に自ら  
ふれて葦よりあふるゝか  
香、地をこめ天をこめ  
月、人、こゝに酔へるやう

寺參詣

花の京を立ちいでゝ  
越路はるく御布教の  
まだうら若き僧なれど  
緋袈裟、金襴、有難し  
職業しごとやすめて今日幾日  
ことさら群衆むれに遅るゝは

お米十八、薄化粧  
一人いそぐ寺まゐり

花盗人

扱帯七尺、三重、二重  
女臈、素裸足、取りまいて  
花に忍んだ曲者は  
手燭の下にひかれたり

「憎くし春の夜さわがすと  
柳の御眉逆立てゝ  
姫は自ら椽に立ち  
御聲もさやにたゞし給ふ



命あり驚破や緋櫻の  
小枝にそつと打ちすゆる  
花の嵐に額垂れて  
たゞ神妙にうづくまる

風 洞

董月一露

伊勢と尾張の國境

港にそゞぐ大川の

木曾と揖斐こそ流れたれ

揖斐養老に源す

傳へ云ふらく、此の河の

源、谷の斷崖に

伊勢と近江を貫ける

風が領ずる洞ありて

近江ゆ通ふ神風に

昔、國主が犬追ひて

七日七夜を經し朝

彼れは恐るゝぬけたりと

今日遙々と來て見れば

驚く、冥府のシホ岩に

先づ風洞をくゞる時

肅殺の氣ぞ迫り來る

人の終焉の呼吸の如

折々息吹く氣のゆれて

頸に顔に冷やけく



天地此處に滅亡ぶとぞ

仰けば落ちむ洞の岩

伏せば燭火きえくくに

冥府に落ち行く路と聞く

私やみの深きかな

鐘乳石の音たてし

水に落ちたる戦慄に

あなやと立てし聲の下

奥なき洞に燈火消えぬ

思ひ出

いさゝ川

旅なるなさけ仇にして

また漂泊の侘住居

八ッ手が岡に雨すぎて

風は秋とし變りけり

蔓草引けば美しき

花は吾が手に残れども

露ぞみだるゝ草叢に

蟲の音はたともだしけり

静黙しばらく古に

吾れと吾が魂かへせばか

思ひは小さき羽生ひて

雲とたゞよひ流れ行く

湖こえぬ山すぎぬ

野は秋草の筑摩地や



一條走る銀の矢の  
奈良井の流れ慕ふかな

岸に匂へる花を藉き  
月の畫きし君と吾が  
双影にほゝゑみ歌ひにし  
「洗馬」なる唄は響けども

二つの夢はつながれて  
野行き花ゆき歸りては  
自然のみ膝に手を取りて  
染めけん頬の榮や何  
つさせぬ思ひは天なるや  
園の泉と湧き出づれ

かよわき胸の花なれど  
しをれぬ戀と咲きけんを

君は北なる市の妻  
吾れは南、山の人  
隔つるこゝに幾十里  
別れて幾つ秋を寝ぬ  
頸つめたう露ちりて  
われにかへれば蟋蟀の  
樂童闇の幕とちて  
戀の遺骸を蔽ひけり

彗星の歌

星銀鱗に鞭ちて

藪  
紫  
影



白熊躍る北洋に  
上るや天地緘黙し  
旌旗颯と流れたり

集まる光先づ動き

疾風、令に従へば

氷山櫓搖ぎ出でて

潮は猛く波馳ける

月に靈なく光なく

群星恐れ跪坐し伏し

妖星ありと扉閉づ

盛なる哉彗星よ

星、赤道をすべり落ちて

龍鰐歡喜の波を揚げ

白熱の海沸き立ちて

潮の路も亂れたり

盛なる哉彗星よ

君が輦くるまに紫の

焰むら立ち廻りく

軌道を逸す天探女あまのじやく

輦を守る旗雲の

下界に靡き來る時

戸隙すきより仰ぐ地の子等は

禍わざはひなかれとこれ祈る



菊合せ

筒井董坡

作

飛ぶや小盃踊るや案山子  
鳴るや鳴子がからくと  
笑顔見やんせ毛見衆が笑顔  
お嫁花嫁米や満作の  
何ンで不足があらうぞや  
五千萬石量りもようて  
三斗俵四斗俵しつかと五斗俵  
積んだお藏の大扉もあけて  
這入れ野鼠三千四千  
孫も曾孫もよんでこい

野分

海に凱歌あぐ龍神が  
矜りの息か砂吹きて  
吹きてあげたり建部山  
村は名に負ふ東雲の  
星屑光をかくまひて  
怪しき雲は魔の如く  
北に起りてみんなみに  
起るや鳴るやうづまくや  
この時祠の獅子は吼え  
社頭の神鶏たゞならぬ  
怒りの頸血を帯びて



警聲高くなきに啼く

案山子があわてふためくや  
鳴子は飛んで鳴らずけり  
高粱闌ぐ畔にたち  
蓑作與作何を恐るゝ

春の磯貝

久保白泉

蛸、雛貝、蛤の

掘る手やめては、打見やる  
沖は南にひろうして  
遠く遠く霞みたり  
まひる干落のことなれば  
うしほはひくう夢の裡  
磯はねむりもたけなはの

人は酔ひたるごとくにて

たま〜濱を東へ  
ゆく嵐さへ韻もなう  
渚の枯藻はよろめけど  
松のくねりは静かなり

されば磯には磯の萬象  
海には海のものぞみな  
さながら、春の靈をうけて  
永劫さめぬ想ひあり

そのきその夢、その磯を  
すぶるがごとく、泰然と  
雲をしのぎて聳えたる



巖はひとり崇きかな

若芽、陽炎、たかま驕榮の

海蘿黄地のしたゝれに

大白巖のことなれば

怒濤あらしの精のごときかな

小鈴、大鈴ふるごとく

海にはつどふ波がしら

砂にはおこる花のまひ

名知らぬ草もひと時に

千貝奏づる春の曲

百いし歌ふ海の謠

籠の得物も興をえて

何さゝやくかひそやかに

石に小蜨のころくと

我を忘れて興じけむ

よろめき落つる大海の

水に音して沈みけり

と見れば海は青透いて

色々砂のそこきよく

こゝにかしこに碧海星

かしこにこゝに海月ゆく

玉藻、海百合、海薔薇

水雲、伽羅藻の野に遊ぶ

小鯛、魴鱒、赤鯶

鱸、すがたの悠々と



岩より岩へくゞり出て  
砂より石にかくれつゝ  
ちささは藻蝦、車海老  
三番叟魚の候うて

かくて今日しも黄昏れて  
霞とばりの七重、八重  
濃雲となりてうつろへば  
水雲はくしき磬りふき

あゝ、壯嚴の大巖  
ひとりねむれば磯の萬象<sup>の</sup>  
海には海の萬象<sup>の</sup>をみな  
ねむりて今日も春はくれゆく

秘め歌

服部楠山

末 枯

地の子に歌を興ふべく  
蟲はこの世に下り來て  
夜の中に送る露を吸ひ  
聲愛らしく歌ひしが

千草もかれしこの野邊に  
花賣る娘來ずなりて  
生きたるものゝ影もなく  
秋うつろひの眺かな

若き旅僧陵<sup>のみさぐさ</sup>の



路をたづねて過ぎりしが  
やがて姿は野の遠を  
かゝれる霧にまぎれけり  
寒き衣を合はせつゝ  
ひとり立ちたる末枯の  
野に美しきものもなく  
思ひにふかく沈み入る  
心淋しく去りがての  
かへりみしつゝ手をあげて  
なびけと云へば枯薄  
風のまに／＼なびきけり

幼き眠

一つになりし幼な子の  
やさしき姉にいだかれて  
夢にいざなふ守唄の  
節おもしろく眠りけり

心もなげに眼を閉ぢて  
呼吸も幼なく胸と胸  
静かに打ちておぼえつゝ  
姉は耳をばかたぶけぬ

この子を生みしほどもなく  
失せ給ひたる事なれば  
小さき心臓の打つたびに  
母の言葉もひゞくらむ



笑みをふくみて眉うすく  
紅そめしその頬の  
亡き母人に似かよひて  
思ひもふかくみつめしが

耳を澄まして抱きたる  
その子の夢を姉も見て  
何うれしさのほゝゑみぞ  
しばく頬にのぼるなり

春 曙 怨

登 阪 柳 暗

衣桁にかけし舞衣の  
寮の小鼓覆ふごと  
ゆるくすべりて春の日に  
金絲の縫はみだれたり

朝睡あさい衾やすみの鶯うすに

小さき夢は破られて  
花に曳かれしわが魂の  
など再びは歸りけむ

爪紅入れの香箱の  
失せしは誰がたはぶれか  
人に秘めたる小扇の  
歌の心の知り難く

柳しづれにほのみゆる  
裾紫の京の山  
七重に包む薄霞  
被衣姿と微笑みぬ



夢まだ残る朝化粧

濃きに過ぎたる口紅も

ふくみし花の染まりぬと

きゝなば人もとがめじを

手飼の兎さかしげに

此處をながめて何とする

より來小兎紅さして

わが舞衣をなげかけむ

鴉のをとり

宗 石 芝

夕日のかげを背にあび  
そゞろ歩きの野の路や  
鄙はゆかしき蕎麥畑  
莖の赤きに花白き

いかなる蔭に聲をのむ

鴉落す童は見えずして

横木の上にとまりたる

鴉のをとりの疲れ顔

秋晴れ喬き樹の上に

さながら地位を得たる時

勇ましかりし兩の羽は

いたいたしくもしをれはて

蠅を捉へ宙に提げ

光さす枝に貫きて

干したるを餌とする

嘴は矛にも似たるらめ



あらゆる鳥の犠牲となり  
日の落るまで野に山に  
嗄たる聲を絞りては  
嘴や血汐ににじみなむ

山 男

長田秀雄

飛驒の奥なる岩山の  
ところ／＼に水ありて  
杉の村立つ此あたり  
只一面の女郎花  
風ざわ／＼と音づれて  
草木の露をゆする時  
山は俄に命得て

化生の如く打ふるふ

秋の月夜の月あかり

流るゝ如く山男

山を麓に馳せ下る

彼は心の狂ひけり

人かあらぬか魔のものは

山のはてなる村里の

灯あかき婚禮の

盃の場にあらはれぬ

其所の長者の姉娘

耻に酔へるをかき抱き

山道づたひ一走り



終に行方を知らずとぞ

龍の歌

星野李溪

思ふ、いにしへ天地の  
裂けにし時が生れ出で  
此の山川の青淵に  
千歳すみぬる白き龍  
洞うらとなりし大樟も  
芽ぐみし頃は同じけれ  
半ば枯れたる其の様は  
共に千歳の形見なり  
七つの鬘かむい、十の角  
星を曳きたる尾は長く  
溪の木の葉を震はして

月にうそぶく夜もあらむ

されば徳ある聖僧が  
尊き佛の慈悲により  
龍の靈をば亡ぼすと  
巖に刻みし石佛

昔こゝなる青淵に  
雄龍雌龍のすみけるが  
白雲ひくく溪に下り  
雄龍を乗せて去にしとぞ

神の權威に堪へずして  
天を追はれし悪龍の  
こゝなる池に下り來て



青淵深くひそみしが

や、苔むせる聖像みづがたや

彫られ給へる二十五の

菩薩の肩をすべりては

朝夕落つる松の露

冷めたき巖に跌坐しつゝ

聖僧何を悟りけむ

襟正さるゝ心地して

淵の水面を眺め入る

元より我の性質さがなれば

寂しき景色あまをうれしみて

涅槃の境に入らばやと

今日又こゝに訪ひ來れば

龍を祭ると二もとの

樟の大木に注連張りて

里なる人の所爲にか

菩薩に神酒を供へたり

### 八重山櫻

中島鎮繪

清水寺

筑紫の春を集めたる

彌生、櫻の清水寺

鈴の音もるる花風の

静かなるかな晝の堂



めぐし古里はるばると  
心も空も美しく  
心ざしたる順禮の  
歌習ひたる子もあらむ

笠に花散る山の寺  
おひづる姿優なるが  
御詠歌誦して眉かろう  
櫻、櫻に愁ひるたり

曲水の宴

御溝に添へる桃さくら  
繚亂として散りぬれば  
束帯の影ゆらゆらと

鳥こそ空に舞ひうたへ

彌生の御花麗らかに  
浮べる盃のゆくらゆくら  
夢のやうに筆あげて  
さらさらと書くからうたや

陽炎見ゆる南は  
絹蓋ぬけて花の下  
薄紅梅の紙とれる  
若き納言は繪のやうに

邊春橋

櫻堤の曙の  
春の星みる邊春橋



波静かなる朝川に  
影、白雲と浮くごとし

立つとしもなく立ちたれば  
八人少女が笑つくる  
人になれぬる鶯の  
袖の下枝にとまりけり

花にうづもる橋の欄  
湧ける薫りの中にして  
人美しきたゆたひに  
尼君何の思ひある

艶の失せたる切髪に  
歌と經とを書きそへて

壺にをさめて封じけり  
或夜ひそかに庫裏を抜  
奇しき小壺を闇に秘め  
深き土中へをさめけり



海  
の  
香



驛馬鬼鹿毛

溝口白羊

驛馬鬼鹿毛、天稟の  
逸氣却つて身を害し  
あはれや、市の凡人が  
情無<sup>じやう</sup>き仕打、假初の  
裝飾<sup>かざり</sup>も遂に奪はれて  
今日、皮剝に賣らると  
友、憤慨の物がたり

冷やかなの世びとには  
露あはれみの心無しと  
豫てより知りぬれど  
蓬萊が島に ふる  
玉の枝も何ぞ



上は碧落を極め

下は黄泉を極むるとも

世界にまたとあるまじい

是程の逸物を

天晴れの役にも立てず

むざ／＼殺し果つべしとか

前世の劫と聞くからは

弱者舎衛のめつばうを

まのあたりに見ては

わくご、怒髪の逆立つに

況んや逸氣あるのみに

めしひの國に容れられず

良き木、薪となるためし

虐げられ、困めらるゝ剩さへに

市人情無きはくじつの  
辱めをばこゝに見る

馬なればこそ、物も言はで

惨虐の子に争はず

自若と最期を觀念すれ

神ます國に斯の如き

蠻劇あるをや許す可き

無明の闇に陥りて

本來の心や失ひし

人間のふるまひ、奇ッ怪也

畜生とは云ひ乍ら

西域檀特せんのがかれ



みこのなさをよく知りて  
綾のおんぞを啣へまつり  
悲みに堪へずや  
おんじやうを妨げし  
可哀あはれの話もあり

是は亦、生ある物の靈長と  
妄に誇るえせ者が

聊の力を恃みて  
神が賜びつるものゝ命を  
ほしいまゝに奪ふとは  
恰も鬼の心かな

昭君胡に嫁ゆくの怨はものか  
罪も無き身を慘虐の

犠牲ひげんとせらるゝ憤り  
人ならば狂ひもすべし  
怨念、鳴る神となつて  
悪あくツくき人間ばら  
いち人も餘さず  
片端より裂いてく  
裂きも捨つ可し

悲しや人にあらぬ身の  
胸は炎と燃え  
血は高潮と騒ぐとも  
報はん術も知らず  
訴へん言葉も知らず  
無慘や、仇の手に曳かれて  
其儘屠所に赴くか



鬼に等しき人畜生にんちくしやう

あゝ抑も之を昭代に

行はる可き業わざと呼ぶや

罪を詰れば嘯いて

此馬餘り肝強く

乗れば落して人を傷け

之を田畑に用ふれば

牛程の役に立たず

聊の重荷を負はするに

一步も動かず

斯かる畜生を生け置くは

家の費え、國の費え

殺すが何の罪あると

得たり顔にも手を拍つて

鐘鼓の調を作れども

臆病の子が乗ればこそ

この鬼鹿毛も荒るゝなれ

無禮の頑童

神馬の威を侵して

陋しき廐に縛り

轡をさへ加へて

千里の駿足を止むればこそ

憤りて動かぬなれ

一たびは戦場に出て、

烟の中を右に驅けり



矢彈丸の中を左に馳せて  
勳功拔群なりける者  
世に力ある馬はある可し  
血を神駿に受け乍ら  
鈍牛のわざをする  
不肖の馬もある可し  
この鬼鹿毛は、泥臭き  
罪んどの田を耕して  
痛々しう重荷負ふ  
下品ゆげんの馬の類ならず  
父といひ、母といひ  
稀代の名馬  
其血を受けたる鬼鹿毛なれば  
とゞろと踏鳴らす蹄の音には

鬼も避けん、魔も隠れん  
鬘を揮つて嘶けば  
獅子も服する氣勢あり  
されば幾度落されても  
是程の名馬に  
乗つたりといふは  
いみじき果報  
末代迄の語り草  
凡人には過分なるに  
俗智とちがらの輩  
柔弱に生れて  
馬乗靜むる術も知らず  
この神駿をもて惱み  
之を荒馬と名けて



殺さんとは非道かな

繁華の子等が一夜のうたげ  
肉屏廻らし

酒を池の水と湛へて

擧ぐる琥珀の盃には

萬金の費えありといふに

多寡が馬一疋

日本六十餘州の中に

養はれぬ事もあらじ

乗れば落され

之を田畑に用ふれば

牛程の役に立たず

聊の重荷を負はするに

一步も動かぬが  
不承とならば  
ならばよし

無益の畜生ぞと思はゞ

疾く／＼手綱を切拂ひ

呵責の鞭を折ッて

轡を外し、鞍を外し

生れ乍らの素裸馬

狭き廐を出して

萬億里、涯無き

廣漠の野に放てよかし

廣漠の野に之を放たば

吹くやなご風



しいじの花を司る  
もろくの神達  
荒野の胸に春を送つて  
美しき春の呼吸は  
無法の人が加へたる  
虐げの傷を劬り  
疲れし彼が希望を勧めて  
驅けるや千里  
馳するや萬里  
此島を遠く超ゆれば  
西も東も、上も下も  
さへぎる者無き自由の天地  
驛馬鬼鹿毛  
勇み進んで  
駿足、雲に入らむ

駿足、雲に入らむ

磬梯竹

小牧暮潮

山菅

南に奔り北に伸び  
躍り狂へる山脈を  
かの蒼溟の果遠く  
湧きもめぐらふ浪と見ば  
ひがしに秀でし磬梯の  
峽より出て、中天に  
浮べる雲の一片は  
洋に一葉の舟ならん



巖間にたぎる夕沙を  
産湯に汲みしわれなれば  
八重折る波の立騒ぐ  
荒海をこそしたふなれ

松原遠く入りがたの  
月にあゆみしいさご原  
曉早く別れ来て  
永き旅路となりしかな

いくとせこゝに陸奥の  
草深山にわびぬれば  
處女の心に燃え立ちし  
炎ぞ疾くも冷えにたる

秋沙渡れる山蔭の  
沼に茂れる青苔を  
小笠に編むとわれ採れば  
短き袖も濡づちしを

巖危き峯の堂  
朽ちたる松の蔭にして  
同じ思ひにけふもまた  
平野の遠を見下ろせば

雪消え残る荒海の  
白雲遠き麓より  
清やかに流るゝ大川の  
淀瀬に波は翻へれども



音なく暮るゝ夕ぐれの  
此しづけさに堪へかねて  
大海原をしたひつゝ  
寂しく山を下るかな

二

せめては胸にもえ残る  
熱き思ひの炎をば  
子年七月峯裂けて  
國土とゞろと火を噴きし  
磐梯岳によそへなむ

磐梯岳の麓には  
湖の鏡のひらかれて  
山の影を涵しけり

北に清やけき檜原沼  
南に濶き猪苗代

漪漣しげき湖の

岸のほとりに來て見れば  
緋の打紐の花やかに  
浪間を染めてかゞよひし  
夕日は遠く沈みたり

八峯めぐらす湖なれば  
八百沙沖に騒がねど  
日方し吹けばしかすがに  
鮎釣る舟は山瀉の  
水門のあたりなづみつゝ



秋としならば雁が音の  
しげく渡らん月の輪の  
里よりかけて月立てば  
雪なす波の敷々に  
光たゞ白し湖の上

目にはろらなる大和田の  
千重敷く浪にあらねども  
一葉の舟よ夜すがらを  
秋立つ水にたゞよはゞ  
悲しきむねも洗はれん

没るさの月に水霧らふ  
湖の心なかにに舟やりて  
ゆられくゝて明かしなば

空にしたひしふる里の  
相模の海に遠くとも

戸の口村

翁いしくも心得て  
戊辰の役の夢がたり  
忘らえがたき無念さは  
十六橋の敗なれと  
曩の日われに語りしが  
その戸の口にけふ来れば  
灣いりえにのぞむ水の郷  
葭の間にあらはれて  
網を干したる楊堤  
橋渡りゆく釣の子等



書ける如き風情なり  
今午に近き白雲の  
湖の半ばに停まりて  
日を照かへす波の面の  
光は強く見ゆれども  
沖なる山とつり舟を  
仄かに罩むる夏霞

東山

百合咲く山に老を鳴く  
鶯の聲絶えしより  
ひるしづかなる温泉の宿に  
奥の訛のさゞめ唄

白日涼しきうたゝねの  
枕に落つる山の影  
伊豫簾を捲けば高樓に  
こぼれも入らん深緑

京の名所をさながらに  
東山とは名に負へど  
紅羅掛けたる欄干に  
背向きて倚れる人もなし

湯川の水を歌姫の  
化粧に汲みし朝々を  
冷たく咲ける容花の  
移ろひ行きし幾秋や



湯の香に染みて幾夜さか  
家に歸るを忘れたる  
夢みる人に告ぐるらん  
瀬音もさやの溪川よ

三穂の浦

都を西に、舟木樵る  
足柄の岳に立ち迷ふ  
雲にはなれてみんなみの  
花橋も茶に匂ふ  
駿河の國に入りぬれば  
廿日の旅をみちのくの  
山に馴れたる吾なれば

風に琴ひく磯馴松  
汀に散らふ白波の  
いやめづらしく見ゆるかな  
海藻の香亂れたる  
夕の磯に下り立ちて  
雲を翻へして沖邊より  
紫匂ふ八百沙の  
よせ來る方を眺むれば

東に遠き岩代の  
山を出てたる天津日は  
千里の路を横ざりて  
今はろくくと駿河灘  
三穂の浦曲にかぎろひぬ



北風吹けば嘶きし  
胡の馬にあらねども  
駿河の海の夕まぐれ  
七月、山に秋草の  
花咲く國をしたふかな

七月、山に秋草の  
花咲く國の二御座  
磐梯山を男とすれば  
月を泛ぶる猪苗代  
嬢なる神の姿かな  
くれゆく濱に戯れの  
砂もて築く山と池

幼きすすさび、事終へて  
山はよそほふ會津不二  
池はかたどる猪苗代

波よせ來れば山くづれ  
波ひきゆけば池うもれ  
皆ことくく洗はれて  
貝や砂子のきらゝかに  
夕べを白う残りたり

燭の火

樂譜の象の分かぬまで  
焰みだるゝ蠟燭の  
弱き光は薄雲の  
暮れ行く色を見るごとく



しづかに室をゆきかひぬ

上にかけたる油繪の

千草の花の紅を

光灰かに隈どりて

真中に立てる少女子の

衣の白さにまぎれたり

青磁の瓶の水あげて

花蘇がへる水仙の

清しき香り葉を出で、

ピアノにむかふ妹の

小さき姿をつゝむかな

「わがたましひよ

羽をあげて

あまつみくにに

たちむかへ

日月もつちも

みなほろびん

かけりすゝみて

みざにゆけ

天つ港も程近き

ヨルダム川の浪荒れて

中瀬になづむ渡し舟

それかとはかり燭の火の

風立つまゝにゆられつゝ



美しき謎

東  
草  
水

花の枕はよそはねど  
燈火青き秋の夜や  
紹蚊帳を透いて夕月の  
庭にほのめく紅芙蓉

七つの蕾七夜の

夢とならむをたのみにて  
心を病みたる少女子は  
永く戀をば思ふなり

振袖紅き幼児の  
ある夜の夢にその花を  
銀の小篋に封じこめ

鍵を渡してかへりしが

何とは知らずほゝゑみの  
鏡に映る朝化粧  
残る一つの花を見て  
美しき謎解き得たり

秘め戀

花咲く天の川岸に  
離別を惜む記念とて  
姫がかけたる白銀の  
ま玉ゆらゝの曲玉を  
さゝげてかへる若者の  
玉鞭もたゆたふ白駒や  
九月の秋の夜は更けて



新月しんげつ淡くにほふかな

黄昏たそがれ海の波がしら

くづれて消ゆる幽愁の

今宵は月の光より

ほのかの絲とつむがれて

小琴の上に幾筋の

絃いとと絃とをわたすごと

池の汀をさまよへる

わが胸かろく纏ふなり

噴恚のほむら身を焼いて

鏡にむかふ少女子が

和肌絡む紅の

緊しき綱をみしならば

幽かなれども水の面

うすき光をすかし見て

われは愁ひと悲しみの

ゆらめく影をとめえたり

久しく秘めしわが心こころの

戀の秘密は今宵しも

月光かげほそくさし入りて

また新らしく開かれぬ

山を仰がばちぎれ雲

海にのぞまば暮の汐

たゞ何となう得し思ひ

はなちて寄せん新月に

ふと摘みとりし野の花の



葦の粉、指にうつること  
心の底に人知れず  
その俤の残りしが  
もろかる戀を白日の  
言葉となすにはどかりて  
いつとしもなく宵々の  
夢なるさまの慕はれて

歌はあれども調なく  
笛はあれども樂譜なく  
花さく國や雪の國  
三年あまりを暮らせしが  
花のうれひは朝の夢  
雪のうれひは夜の夢  
胸にひめたる思ひをば

やさしとばかり涙にて

房うるはしき塗籠に  
鳴音やみたる鈴蟲や  
燭の下にうかがへば  
姿小さく息たえて  
柩となれる秋草の  
いためる花を枕せり  
悲しき折は蟲の音に  
かゝる想像もるかびしよ

かよふ焰は腫より  
腫を射貫く戀の征矢  
わかき命の戦に  
勝ちたる人は野に立てり



もとよりわれは傷負ひて  
弦なき弓を持てれども  
うす紅雲の楯を望て  
くれゆく里をかへりけり

白百合小舟しつらへて  
思ふがまゝの花を摘み  
ゆられゆられて三日月の  
淡き光に棹さゝば  
胸の愁ひはしづかなる  
浪の千里を馳せめぐり  
情思は花にとゞまりて  
珊瑚の床に沈みなむ

\* \* \*  
月光ほのめのく木がくりの

釣燈籠を眺め入り  
古き、新のもの思ひ  
くりかへしつゝそのかみの  
書堂の壁にのこされし  
濱邊さまよふ戀の子が  
あるかなさかの繪のさまを  
さみしき笑にそこはかと

鴿

窪田うつぼ

魂は添ひてはあれど  
眼はみえぬ君を憶へば  
のこる香を衣にかぎては  
花ちりし野にもゆくごと  
追憶のはかなき中に  
君としもむかふのみなる



あゝ我をあはれと見つや  
嘆きつゝ寐し夜のあさけ  
枕邊にほそき息いきして  
あやしくも鴿ぞゐにける

秋たけつ天の河原の  
しろく澄む旅のゆふべや  
武藏野の風さゝつゝも  
ありし里おもひもやれば  
燈火にそむきて一人  
そゞろにも物つぶやか  
あゝ我をあはれと聴くや  
手枕のつめたきあした  
わが閨に忍びいりける  
鴿よ汝は何にてありや

蓮のはな萎むがごとく  
野の鳥のきゆるがごとく  
我れおきて一人ゆきける  
君はしもいづこにありや  
僧がならず鉦かねの響は  
君とわが別離わかれの聲か  
あゝ否いなずうべなはざるを  
背きても行くべき君か  
よし姿かはりはするも  
歸りきて添はんとすらむ

あゝ縁岸えんし打つ浪に  
乗りて來し海の小貝や  
かへりゆく浪のすさびに



離れ去るはかなきならじ

君ありとおもふ思ひに

君はしも我に生くるを

さりやいま夢に咲きけん

一輪の花とまがひて

ゆくりなく白き小鶺鴒の

我身にぞ添ひてありける

怖ぢもせぬおよび姿よ

うれひある路を重ねて

戀ふる家に歸り來にけん

旅人ののどけさ見せて

ともすれば落ちぬまみや

えも云はぬことばを見する

寐ねてこそ見もえん姿

見るほどの安くもあれと  
はるかなる路を歸りて  
我れをしも夜半に守りし

あゝ家は眞砂とあるを

いかにして我れをば識りし

さばかりに我れを愛づるは

天にして一人と思へ

げに汝は鳥かあらぬか

圓らかに我れに寄るかな

滅の神いぶくいぶきか

屋をゆすり風鳴る中に

鶺鴒とわれあひ向ひては

夢ごゝち涙を流す



みじか夜

水野葉舟

○

あらはに咲かばからたちの  
風いたましき花ならむ  
若葉のかげにひそみてぞ  
咲きにし花のからたちの  
雨にもぬれじ風もこそ  
吹けどよそなる姿にて  
ほのめくさまやかたたちの  
宿世をとほし何ならん  
夕さみしくかどの戸に

(二七一)

君まぢかねて立ちわびぬ  
そらゆく雲も影まよふ  
垣根に白きからたちの花(からたち)

○

みだれて咲ける山吹の  
なよび小枝のなびけるを  
ひけばわが手に八重の花  
もろくもちりてこぼれけり

(三七一)

袖にのこりし一ひらも  
君が思ひに似たるより  
いかではらはむ立ちつくし  
心ゑましき君を見む



月さす影に相見れば  
やさしき君が姿かな  
思ふがまゝに手をとりにて  
月に消えなば思ひなからん(山吹)

たけくしき夏草の  
みどり交りに生ひいでつ  
小川の岸に花はさけど  
名もなき花の無名草

夢よりさめて朝川に  
影こそうつせ行く水の  
夢は遠きに誘はれて

思ひなげなる姿かな

黒き胡蝶の狂ひきて  
しばしは眠れ花の上  
もとより蝶の身にしあれば  
めさめて空に歸るかも(なゝし草)

○  
廢れもまさりし夏草や  
ありしにも似ぬ古庭の  
柳はさみし葉櫻に  
となるは雄々し桐若葉

夕雲まよふ空の色



雪の心を抱きてか  
若葉のかげにおぼめきて  
たかき香まよふ桐の花

人に知られぬ枝高き  
花にぞ君はおはすらめ  
心高きをしたひても  
空のみこふる君にして(桐の花)

○

露おく野草野の小花  
路もうもるゝ露の路  
袂もぬれむすそもこそ  
君はわかれてかへりゆく

月しる影に相見ては  
月いるまゝにわすれけり  
かくていく夜のつゆのみち  
君にわかれてかへりけむ

あした日かげにかゞやきて  
置きもまされる露のみち  
なびける草のおのづから  
路となりけり君とわれとに (露のみち)

○

野を尋ね葉かげさぐれば  
葉がくれてみのるいちごの



あした置く露にうるほひ  
秀でたるさんごの眞珠

紅のこぼるゝばかり  
流れては酒ともならむ  
たふとしやたれにたまひし  
野の莓葉かげのまたま

君はげにまたまなりけり  
飢えかわさこひてしよれば  
葉がくれてものぞありける  
君はげにめぐみなりけり (野莓)

○

若草の丘の東に  
かすみ立ちかすみこめけり  
風の来て風の消えゆき  
夕ぐれの空の静けき

さや／＼と梢そよぎて  
若葉さす森もくれゆく  
夕どりのつばさやすめて  
雌を呼ぶ聲のをり／＼

やがてまた鳥もいにけむ  
雲もまた山にかへりて  
夕ぐれや、丘の春花  
いと安きゆめ路こふらし (夕)



青葉をすぎし雨の間に  
 はかなくもこそたゝへけれ  
 浅きも何かうらむべき  
 青葉ぞうつるにはたづみ  
 雲もゆきゆく影うけて  
 風のかすかに波たてぬ  
 光もおちてかゞやけど  
 浅きをあはれにはたづみ  
 君が心にうつりける  
 雲のゆきゝの一時の  
 われはさせるに似たりけめ

忘れつとのみ君よいそぐか (にはたづみ)

めじろ

緒方雁峯

籠の戸を少しく開き  
 餌をやる手元  
 いかに洩れて目白鳥  
 胸をそらにかけ去りぬ  
 空籠に椿を入れて  
 待てど歸らず  
 呼鳥をかけてよべども  
 歸り來ぬ終日目白

なじみなき花を枕の  
 いかによべの夢つらかりし



立かへり聲も清らか  
今朝、籠に餌を求むる

如何なれば汝は歸りし  
野の春を捨て、歸りし  
山風に羽のたへてや  
水の音に胸やさわげる

とびなれし渡り木せばく  
囀るや胸の和毛の  
平和の外にみとめん  
何ものもそこには有らず

顧る今のわが身の  
似たらずや小さき目白鳥に

いくたびか家を殘せど  
え堪へずに旅より歸る

あゝされど小夜の寢覺に  
手を當て、胸をうかゞふ  
そのいづこかに「平和」の  
やさしき歌の絶えずかよへる

海の幽黯

大内白月

北海ひさしく氣は鬱して  
濃き霧ひねもす面を封じ  
彩輪影なき幾日幾夜  
人、脈亂るゝ、遲疑に、危懼に

藍緑兀げたる磯の小山



嗚々、悲風に古松泣くや  
精舎、夕を鐘に判じ  
血迷ふ破響は砂に入りぬ

亂礁千尋を空にぬきて

頂、微光の名残あるは

あゝ茲晦冥、潮路深く

龍栖む底より上り來るか

闇さに敬つ耳朶を打つて

流れは鋭き無間の床

狂瀾たま／＼岩を嚙むや

碎氷狂うて胸をつくよ

疾風馳せ過ぐ時たちまち

鉤月一閃雲を破り  
落ち方すさまじ血に塗れて  
冷然一瞥を投げて消えぬ

機を得て洪荒威力強み

萬頃全く領に入れば

冥符の叫喚波を鳴らし

渦なす魔壇に犠牲を宣るか

茫々文なく、時は今と

無明の怕裏み終へば

鉛か墨ずみ遠くこめて

幽黯たてぬき極み知らず

三千の大地すべて凍り



隻脚墜ち来て踏處わかず  
毛孔、どよみにおちてふたぎ  
睫毛、すこみに結びあひぬ

默想自在の夢に駈けて  
霎時は精魂仙に適くに  
非情よ寒風耳を劈きて  
此世の刃にやがて強ふる

無有の寂靜襲ひくれば  
神力漸くすくみ行くに  
わなゝき甲斐なの腕を按じ  
抱くや小胸は氷と冷えぬ  
行雲脚並に風を見せば

躍ぶ水水泡に海を見せば  
よし茲濛鴻不定なるも  
誰れとて夜の威に怖るべしや

果して霰の、勢得ても  
堅さか、小指に早も消ゆる  
思ふ、太乙の前にしては  
罪の子の倨傲遂に何ぞ

夜の海無極の寥を展べて  
うしろに頼るなき心責むか  
あゝ今迷へり、此の子切に  
滅不動の空に悶ゆ

あゝ脈亂るゝ、遲疑に、危懼に



彩輪影なき幾日幾夜  
濃き霧ひねもす面を封じ  
北海ひさしく氣は鬱したり

蝦蟇の歌

碧血見

爾はそも、醜の化身か  
青きは怪美、嘲侮の色  
眼さながら魔法師の  
呼吸にくもりし寶玉に似て  
銹たる足に草わくるは  
呪詛の老媪が手ぶりの如し  
野神がくらしふところに  
十年あまりをはぐくまれて  
今靄しろき水際の

石に腹の班を冷やし  
そぞろの興に誘はれては  
ほのかに香る天の氣に  
咽喉の笛をふるはせて  
人か靈をよぶ權力あり

ちひさき蟲の魂吸ひて  
光るひとみをこらすとき  
恐怖を花の瓣に鑄り  
地に「自若」の足踏かたく  
星をあざけりて氣を吐けば  
露は眞珠とこぼるらむ

膏を涌かす背には  
蜂の利劍も鈍るべし



毒を醸すになれし手は

いく度百合の懐に

胡蝶の夢やおそひけむ

蟾螂の子夜な夜な斧を研いで

爾がうしろを窺へども

が不敵の構へ見ては

翅ふるはしうてつくくくと

魔法を知らぬ口惜さを

落の葉敷いて石垣の

くづれに誦すは陰の卷

跌坐青苔を舐りつゝ

闇をあくまですゝりては

瘦骨たかくゆるがせて

蝮の戀や詛ふらむ

たくみの家をぬけ出でし

木彫の人を見るごとく

爾が一族とこしへに

「おそれなき身」となり得たり

されば夕やみ野をよぎる

くす師が裾をくはへ曳き

銀の小匙をうばひ來て

聖者が戒にそむけども

石ともならで世をすごす

爾は蟲の魔王なる哉



毒蛇物語

高田浩雲

北ヒマラヤの高峯を仰いで  
千古消えざる雪に呼吸し  
流れつさざる恒河をみおろし  
日光地を焼く印度の野に  
土人となりてわれは住むなり  
満身古銅の色と輝き  
生氣漲るそのいでたちよ  
道なきかなた蘆荻叢り  
椰樹のはやし蔭を拓きて  
莓あさると素足ながらに

(二九一)

韋駄天ばしる猛きいきほひ

そのふところに胸輪飾りぬ  
この輪眞黒の毒蛇コブラぞ  
獅子はをのゝき猛虎悸れて  
小さき姿に伏してぬかづく  
コブラが威力、毒齒の功德

(三九一)

不思議や此蛇人になつきて  
例へば稚子の母につくごと  
食を共にし抱きて眠り  
山路の友と胸にまつはり  
莓の籠に満つるあれど  
肩よりあらはす頭あやし  
紅き舌もて舐ぶるも常ぞ

(三九一)



今し盛夏の晝もなかば  
日神が金の矢幾筋うけて  
血は汗となり、つかれに苦み  
コブラを抱きて憩ひし木蔭は  
世界の教者、佛陀が生れし  
無憂華樹ときこえたるなれ

迦比羅の城趾を右手にながめて  
教者が逝にたる後の歴史を  
思ひまはせばさても甲斐なや  
異族をそねみ、種族あらそひ  
はては釋迦族、憍薩羅が王  
毗盧釋迦の爲めに亡ぼされて  
世尊が生地確かとわかず

三千餘年の黙せる曆に  
ゑがく術なき後世のうらみ  
あはれ渴仰の修道者來りて  
空しく荒廢のあとを尋ね  
回顧の涙にくるゝも幾何

猛者コブラよさても思へ  
汝は獸王獅子をも喰ひ  
單身世界の權者とほこりて  
威力地上に比ひ無きを  
力なく武器なき弱者、土人に  
渾身の愛をやさしく捧げ  
行住座臥を懐にいぬるも  
幾世の縁と知るや否や



元これ菩薩、魔界に陥り  
 あはれや毒龍の群に入りぬ  
 疾風を起して雲氣に乗じ  
 逆鱗猛く、中天をみだし  
 つかれて寸尺の小蛇となりて  
 拳石の裡に安く眠る  
 變化はてなき幻師汝よ  
 衆生一度汝を見れば  
 強きは氣往きて草に斃れ  
 弱きは軀も魂も碎かる

此龍一日華林園にて  
 慈尊の奇しき説法をきき

毒惡六根の垢を洗ひ  
 三界境上に思を走せて  
 十方諸佛の供養を願ひ  
 法界幽なる眞洞に入りて  
 思惟すること既に久し

瀾水星の花をひたし  
 例へば有心者白虹のうちに  
 渴仰の尊者を垣間む如く  
 默會もくゑに耽れる姿崇高く  
 文象、衣紋に身をば飾り  
 環の如く幾重の輪をなし  
 七色燦たる蓮華に似たり

獵者そを見て獨言すらく



「希有や此蛇花輪の如し

その皮を剥ぎて國王に獻じ

華服の飾りとなすを得んには

我が身は富の根ざしならん」と

驚喜、一刀を抜き持ちかざし

あはや毒龍を切らんと欲す

一小獵夫かれ何者ぞ

怪力奮へば天地を覆へし

六合忽ち修羅場と爲さんを

一念悟道の寂宮を慕へば

軀は假の住家の如し

有漏も暫しの夢と過せば

即ち本化の淨地に入らん

幸か、獵夫に皮を得させん

恵か、汚族に肉を與へん

持戒よ、かくて唯一のたからと

眼を閉ぢて息を殺し

獵者が屠るに身を任せたり

時に炎天大地を焦し

水滴涸れて樹木なえたり

忽ち雲氣五彩をいろどり

白烟かすかに漂ふあなた

金鱗まばゆく光明ひかりを放ち

南を指して遠く失せたり

此時赤肉地上に積んで

血潮は蜿々河を流しぬ



飢<sup>うま</sup>たる鳥族、瘦<sup>やせ</sup>たる獸類  
あらゆる昆蟲集ひ來り  
山なす肉を食ひつくせば  
凋れし草木は血潮をすゝり  
枝葉の末まで赤く染りぬ

あはれ肉塊と血潮を残し  
下界を逝きし毒龍が行衛は  
欲界第二の忸利天とや  
成住壞空の災も來べきを  
大劫小劫の吐息もまたず  
あはれ罪障の絆は解けて  
再び人界の凡夫たるべく  
迦比羅に近き嵐毘尼園なる  
無憂樹下に産聲あげし

釋迦牟尼佛とは誰れか知らん

宿世の仇敵、生死の間垣を  
超えてまつはる毒草の蔓か  
血族縁の末につながれ  
またも此世に出でし獵夫は  
ガングの貴族の一徒を率ゐし  
世尊が徒弟提婆達多ぞ

三度灰身の禍を恐れず  
尙説く救世の崇き御教  
膝下に伏して助けを得たる  
八萬諸天の得道の士よ  
奇遇か、前世は鳥類のやから  
毒龍の肉に腹を醫やして



直ちに汚穢の土と化せしも  
輪廻の鎖に魂を縛られ  
此世に龍化の佛陀に救はれ  
流轉生死の境を遁れて  
即悟無生の宮に入りたれ

三

斷崖空しく苔をいろどり  
三千餘年の月日流れて  
毒龍再生のゆかりも知らず  
世尊が遺教を他國に遷し  
國を奪ひし文明の鬼に  
人を毒すといたく嫉まれ  
年に幾百の生命を失ひ

汝が族亡ぶも近きにあらずや

抑々コブラが曾祖毒龍は  
默念悟道に入らぬそのさき  
無漏の湖中の大蛇と婚し  
生まれし愛子は汝が祖コブラぞ  
炎天火皿の熱にやかれ  
湖水は涸れて大蛇は苦み  
求むる居所も世にあらばこそ

夫が化道の戒を保ちて  
頓悟思惟に耽るそのうち  
あはれ無殘の獵者に屠られ  
身を世に残して天に行きしと  
聞きたる大蛇、節に死して



浄土の樂を共に得ましと  
眞洞を流るゝ血潮に浴びて  
其身も將た死に就く刹那  
其子コブラを膝下に集め

『夫がかたみの如意寶珠を

汝等子孫に永く傳へよ

小さきその身に保ち得ずんば

口にふくみて不淨を避けよ

父が遺ししるしはこれ』と

兄なるコブラの首に繋ぎて

汝が母大蛇は天に昇りぬ

かくて冷酷の世に放たれ

汚土山岳の草叢にさまよひ

即身成佛の御法も聞得ず

しばしば迫害の境におちいり  
寶玉をふくみて、毒齒をふるひ  
難を遁れて此に保ちし  
汝コブラがその威よ如何

第九滅劫の流れに従ひ

幾百代のコブラが子孫

祖先、毒龍の幻魔に比して

身の丈三尺、矮小き軀も

争鬭に猛き歴史を殘し

今は世界の權者と誇り

惡鳥、猛獸もその前にひれ伏し

高き譽れに汝を仰ぐ

汝が祖の化身、佛陀が度せし



八萬諸天の道士は我が祖  
天のめぐみか、佛智のたくみか  
祖先の縁を此に交はして  
再び汝と我は結びぬ

かくて世尊が生れ給ひし  
その木の蔭に汝と憩ひて  
遠きむかしを顧みれば  
天契は實にたゞならぬごと  
その行末もかくてあれよ  
因果の波にたゞよふ二人  
眞如の海に永久に榮えむ  
さらば靈光の一闪に照らし  
奇しき縁の絲をさぐりつ

靈櫻樹賦

佐々木たつみ

たとへば秀才、題をえて  
むかしなりける情思より  
新しき句を探ぐるごと  
あるひは妙手、譜をとりて  
ふる代傳て來し琴緒より  
わかきしらべをふるふごと  
枯れもしぬべく老いにしが  
靈ある櫻、季節にして  
花、あてやかのよそほひに  
常少女なる美のとはの  
齡をこそはほこらしう  
白日まひるの空をかざりたれ  
いで盲人まうじんもたどり來て



奇蹟に似たる春の火の  
不滅の熱を指にふれ  
崇き垂示を感ぜずや

幹も朽ちたり、根もふりぬ  
梢にかけしふと七五三も  
苔、鈍黒うざれたれば  
いはほの姿さながらに  
さらば火山の底ひより  
とけてあふれしくろがねか  
あだかもほのほ黒煙に  
捲かれて高く雲を焼く  
紅蓮の色にあざやかさ  
末、天風にみだれては  
かすみと空に流れたり

群衆かへりみさしやきて  
これ不思議ある櫻なり  
もし根に斧を揮ふもの  
そは眼、くるめき倒るべく  
かりそめにしも枯枝の  
細さを竈に運ぶとも  
空に血汐の色そめて  
その夜、流星雲を墜ち  
猛炎人を殺さんと  
げにこそ―むかし黒染の  
櫻の精をうつくしき  
都なよびの舞の子が  
春夜の灯かけ、襦袢の  
繡箔ちさし袖かづく



手ぶりにわれはうなづきし

こははた顯證、垂跡の

たふとき靈をしづめけん

威嚴ある哉、高さより

とほくのぞめば下に見る

加賀ははるく、春の野の

色さま／＼の色彩も

はれ鳳輦に隨從する

供奉百官の装束や

こゝに王者の驕ありて

花はかざせるさぬがさの

揺々として適さもせず

塵にうづまく春の日を

晝の日、ゆふ日、立ちつくし

立ちつくしては夜となりぬ

彌生は星もおぼろ夜の

瞳と見れば面帕に

つゝめる戀のまなざしか

ほそき光はしのぼしく

しづ枝ゆらめく短冊の

金紙銀紙にきらめけり

ともしび

佐藤澱橋

北に旗まく旗雲の

暮影村里に落ちしとき

平和のつばさ身にもちて

禽はねぐらにかへりゆく

星影に



星屑やみにかゞやけば  
灯火天の旨知りて  
『無限』より來し夜の神の  
裳裾を縫ふに似たるかな

あゝ旅にして鄙唄をさゝ  
ひとり憂愁に惱むとき  
ならの木陰に透かし見て  
星のきらめき仰ぐとき

村の鳩鳴く森かげに  
紅の花散らすごと  
灯火ゆらぐ方見れば  
誰か平和を思はざる

静かに覆ふ闇の底  
かすかに放つ光こそ  
うらぶれてゆく旅の子に  
夜の慰籍を與ふなれ

清らけき戀は星にあれ  
高き理想は空にあれ  
あゝ人間のともしびを  
絶えず下界に燃えしめよ

山靈湖神

内田茜江

行者、雲に身をのせて  
ひらさし鍵の跡寂びぬ



奇薫、朝に沈んでは  
夕、含満に狭霧吹く

萬古の空の露隕ちて  
湛へて湖と溢れたれ  
冷帳すべる高原の  
草の根古き戦場や

山神吹く靈氣に蘇生へる  
仙閣、鶴のみだれたち  
伽羅の香けぶる廻廊に  
瑠璃七寶の朱勾欄

霞を醸す水の精  
幸姫ひたす袖の香に

湖心の靈の樂ひゞき  
檜扇ゆらぐ舞の彩

千手松濱、歌が濱  
湖の氣なびく紫の  
朗らと昇る神の嶺  
春を司さの朝すがた

二

掛菜の霜に雞鳴いて  
荒壁紅う日はのぼる  
霞どめぐる森の家  
機もる窓に遠いかな



獸が醒むる白樫

炭焚く谷の小さく原

竈に翳すや老の手に

孫と小鳥を育つ哉

萬歳すぐる梅の村

麥生の波の鋏初を

やどりて高さうす黛の

平和の影か風

教への子等がちも照りて

天皇讚ずるや高樓の

木の香あたらし聖壇に

かゝりて淨き村の聖

三

牛の子放つ那須曠野

常陸に入れば川水の

那珂の流に牧の子が

笛かすみ行く關東に

聳えて高さ緋緘の

北那須嶽の將軍は

矢はなつ姿陸奥を

壓して限る越の空

朔風送る海の香に

雪吹きなぐる銀の

老たる山は宰相の



白根、鳥帽子の金精よ

庚申、氷室銀兜の

天路にわたる槍襖

紫金の緘し根本嶽

王者に參ず武者姿

南、眞砂路、里荒れぬ

歎きの春を渡良瀬の

世の子が眉に慰めや

雲こそ沈め赤麻沼

沼の香を姫は汲み

琴の音流す鬼怒の水

棹の手やめて片帆かけ

棹は梵火を載せて行く

四

空に漲る平和の

野は満ちかすむ糧の丘

七彩とけて流れては

人美しき戀きよき

東の毛野の國原の

地の鎮めの雄々し神

美まし國原下毛野の

水を治らする姫の神

威嚴を保つ金笏に



盛んなるかな萬物の  
平伏す眉を壓しては  
靈山、搖がず、雲を吐く

み空の色のあをくくと  
影は祕鏡に封じられ  
姫の粧ひ世はなれて  
湖の光ぞあてやかなる

鄙の手ぶり

平井晩村

祭

そろた花笠、桔梗と牡丹  
笛と太鼓で調子をつけて  
鳥居くゞつて、白齒の娘  
背で結んだ、紅梅たすき

祭見るとて在所の娘  
宵にちツくら口紅さいて  
かたくつゞめた十八島田  
誰が結んだ白元結

花で飾つて舞姫のせて  
ひげや、ひき出せ祭の車  
お花、名高い舞子でをりやる  
帯に疊んだ舞扇

京の紅屋で寒紅買うて  
誰にさをやら祭の宵に  
揃ろた、揃ろたよ出雲の祭  
花と花とが、花笠が



佐渡ヶ島

戀し戀しのわが夫は

佐渡は四十九里浪こえて

遠い小島へ金掘りに

一昨年立つてそれなりに

金のかんざし、玉のくし

桐のたんすに、五百兩

千石船に帆をあげて

歸るはいつの春ぢややら

寝物語りの一ことが

虚言でないなら眞なら

たんすや、くしや、かんざしや  
それはうそでも、戻らうに

飛んで千鳥となれるなら

いまも行きたや佐渡ヶ島

戀し戀しのわが夫は

遠い小島へ金掘りに

山家の春

木賊刈るとも山家の者に

木賊みたよな刺はない

磨きや音も出る藪鶯は

市ぢや聞かれぬ艶を鳴く



三夫婦揃うた山家の春は  
鯛さす枝、柗庭に  
鬼に打つ豆十俵軒に  
積んだ苦勞はこれ寶舟

酒屋三里は手綱をゆるめ  
鞍で敷へたち地藏様は  
九十九體ぢや、一體寄進  
百はよい數、ばゞが歳

雪に日暮れた万歳殿に  
葛を温めて、お宿をかせば  
此の家目出度い、鯛つる夢を  
鼓枕で見たと申す

山家の暮し

山家暮しは杵さへかりて  
隣、となりで一臼分けた、  
婿は炭たく、嫁女は市へ  
市はよい市、魚市、  
風呂がわいたと貝吹きならす  
澤のお由は、十三七つ、  
七つ下りの裾寒さうに  
招く手振にや、月も出よ

布子ぬのことつぷり冬の日暮れて  
雉子がなくく、禿山低く  
越えて狐に化されまいと  
急ぐ後ろに月が出た



森の泉

小杉紫陽

象<sup>かたぢ</sup>をかぶる白雲を  
鳥の諸羽にかきくづし  
森のいづみの底ふかく  
世の祕め事を沈めけむ  
櫟<sup>くもき</sup>樹の梢いかめしく  
天蓋かけて横しまに  
かたく封じておほふかな  
それ瑤瑤の星ちりて  
澄める泉にしたゝらば  
苔の衣のあたゝかき  
女神の匂ふ裳にふれ  
溢れて流る眞清水の

岩にせかるゝ白き石  
珠となりてや歌ふらむ

長き旅路につかれては  
休むすべなき世の波の  
頽<sup>やみれ</sup>廢に狂ふ時しあれ  
あるは夢路の甘酒の  
萍<sup>はこり</sup>のしづく涸<sup>か</sup>れ果てゝ  
情<sup>なまけ</sup>の泉時しらず  
なれがほとりに匂ふかな

花かぐはしき朝より  
緑いろ濃き夏の夕  
さては黄金のいろまさる  
秋の匂ひの満つるまで



木末したゝる白露の  
こりて泉となりにけむ  
掬ぶがまゝに流れゆく

藝術の園をかざりたる  
神の彩筆そゝぎては  
岩間にこもる夢をさへ  
戀のさやぎと變りつゝ  
かすかにひゞくせゝらぎも  
妹がすすびの白がねの  
笛のしらべと通ふかな

秋は淋しきもみぢばの  
もゆる焔のくれなるの  
愁の水をさそひては

若き血汐のほとばしる  
流れは早き花の下  
更に落ちゆく岩かどに  
ふれてかつ鳴る岩清水

静かに聞けば森かげに  
鯨聲をつくろふ萬軍の  
眞弓の弦の鳴るごとく  
天部俄かにどよめきて  
劍の霜を拂ひては  
長く地に曳く角の音  
流れの末にどよむなり

君、見そなはせ星のそら  
北斗の影は冴ゆれども



岩間の笹の葉をわけて  
世の落魄おちぶれを歌ふなる  
森のいづみにうつしては  
亂れてゆらぐ天の花  
榮はえある冠地に落ちぬ

さあれ再び樹々の葉の  
くらきに沈むかげ見れば  
夜の思ひは静かなり  
清けき酒の雫には  
沈める魚も酔ひしれて  
光り彩ある月の輪の  
さやけき方を迎るかな  
あゝ／＼清きしらべかな

板戸をもるゝ爪音の  
ひびきに通ふ小夜嵐  
それにも似たるさゝらぎの  
流れたえせず走りゆく  
海の辛さに堪へざらば  
とく立ち歸れ森の泉よ

野の夢

平方曉聲

姫が秘め庫くらあさりつゝ  
こは美しと紫の  
緒ひもある巻をぬすみいで  
世に誇らんとさまよへり  
友の歌ふに興じつゝ  
花野草野をたはぶれて



少女罪なや詩の巻を  
草若き野にわすれたり

百合あり、そこに匂ひては  
詩歌が奇しき靈をえて  
其一まきをぞたづぬなる  
姫の來るをまちわびぬ

蝶あり、そこにとまりては  
花歌よむをいぶかしみ  
其うた聲に耳かして  
しらせを姫にもたらしぬ

夢に歸れる蝶々の  
さゝやぎ姫に通ひけむ

尋ねつかれて伏し居たる  
姫は草野に起上る

導かれつゝ野の路を  
蝶の行くへにつきそひて  
榮光<sup>ひかり</sup>みちたる野を西に  
たづねあてけり百合の花

詩歌<sup>しうた</sup>に生きて詩に逝<sup>ゆ</sup>ける  
詩歌の聖なる姫が夫<sup>せ</sup>の  
心こめたる詩<sup>うた</sup>の巻  
幸あり、姫にかへりけり

初め偷みし少女子は  
野に忘れたる詩の節を



思ひ出さんと百合の花に  
唇をこそふれてけれ

霜 柱

朝倉蘆鳴

朝の宮殿みやさらゝかに  
神のさざめる霜柱  
菊の枯葉も底映る  
紅うすき玉床や

櫟の木の根一めぐり  
土のやはさをたよりては  
うねなしたてる長き城  
遠く枳殻の垣根まで

こゝに小山の裾に據り

光輝く殿造り  
光榮ある座裡みくらうちにして  
扇は人に秘められぬ

やがて旭の昇りなば  
稜角彩を現ずとも  
鳩の下り來て踏まぬ前  
運命脆く壊るべく

命短き朝あけよ  
たくみの長き思ひてよ  
わりなく落ちし我が泪  
珠の柱は流れたり



花車

長谷川春草

花をかくせるうす霞  
空さえ匂ふあしたより  
ほこ立ちつゞく大江戸は  
春の繪卷の半なり

着つれて通る花笠も  
色紙貼りたる萬燈も  
湖の如く湧き回る  
大路の人にもまれつゝ

風やはらかき小松原  
こゝは都の片はづれ  
動くともなき陽炎の

きらめく中をねり行くや

金五、十六前立の  
まだうら若き眉つ毛に  
今日をはれなる粧ひの  
風情あるかな冠着て

櫻、山吹、白梅の  
五彩は空にみち／＼て  
鈴のひゞきは山裾の  
松の嵐に通ふなり

お八重もおなじ年頃の  
面をつゝむ繪日傘や  
祭見るとして長き日を



柳の蔭に立ちけるが

浦島の子が玉手箱  
手篋の裡にひめられて  
いつしかたけし振袖に  
涙を知らぬ子ありしを

紅をさしたる白き頬の  
われを忘れて見おくりて  
春日うらく花車  
影はかすみになりにつけり

玉川きぬた

藤波樂齋

所名に負ふ玉川べりに  
細いけむりのたちゆく軒は

女世帯も花香のさかり  
姉と妹の住家にござる  
あねは二十一妹は十九  
ふけてきこゆる小夜きぬた  
露をいとふか亂るゝ髪を  
包む白地の手拭までも  
地強木綿の直なる氣質  
家をうしろに河原を前に  
むしろ一重はこの世の浄土  
中にすゑたる布うち臺は  
膝をへだての中垣なれど  
へだてないのは二人の胸よ  
あねが笑へば妹も笑ふ  
聲も拍子も相々づちの  
砧しらべはみごとにござる



たゆみきしるは夜風の業か  
とんとすとんと  
すとんととんと  
さえる調子や更けゆく空を  
何所へゆくかや初かり金の  
飛ぶを見やりてうつ手を止め  
申し姊さまあれ見やさんせ  
五羽や六羽や夫婦に子供  
家内けん族羽うちかはす  
鳥にひきかへ我々同志は  
親に離れて大事の良夫  
遠い他國で討死なざる  
あとは寂しい月ごろ日頃  
誰に見よとて化粧しよぞ  
節供日待も交際なしに

春の飾りを涙ですごし  
盆の踊も闇から見やる  
今日が現か昔が夢か  
蝶よ鴛鴦よのからかひ口を  
結句うれしく狂うたことを  
想出せば胸さへ痛む  
因果者よと涙でいへば  
姉はまぶたに露おき添へて  
二年違ひに持たる良夫  
同じ國さで討死するも  
先の世からの約束ごとよ  
後家よやもめと名物らしう  
若い人等に笑はれ草も  
つまは重ねぬ心のちかひ  
あだなうはさは佛へすまぬ



況して可愛いかたみの子供  
共に育て、男にするが  
わしら二人がこの世のつとめ  
分に過ぎたる御さげ金も  
年を積んだら田畑買へる  
髪は剃らねど尼よとおもひ  
伽羅よ椿の詮議もいらす  
市日祭りの義理かくとても  
晝は機織り夜はまたきぬた  
雨に縄なひ雪には草鞋  
藁の上から父さま知らぬ  
あれや子供は可愛うないか  
良人々々とこの姉一人  
なんぼせめても十萬億土  
かへりやせまいぞまう嘆きやるな

あさらめよとて背なでさする  
姉のさとしは骨身にこたへ  
許しなさんせ毎夜のやうに  
愚痴を云うてはなげさをかける  
想ひ出すまい氣嫌も直す  
なかぬくと耐へる妹  
忍びくしあねさへ共に  
こぼす涙が夜露の布に  
小づちおつ取り手向のきぬた  
うつや現の境をこえて  
快樂浄土の雲にも入るや  
月にひびけと玉川きぬた  
巻いてかへして返して巻いて  
たゆみさしるは夜風の業か  
とんとすとんと



青

う

み

す  
と  
ん  
と  
と  
ん  
と  
う  
て  
ば  
こ  
だ  
ま  
の  
か  
へ  
し  
の  
砦  
河  
原  
表  
や  
遠  
山  
里  
の  
霧  
に  
ま  
ぎ  
れ  
て  
消  
ゆ  
る  
ヤ  
レ



人故妻を逐はれて

横瀬夜雨

水の上飛ぶかげろふの

羽を鯢うまの透かし視て

尾上の花や散りくると

ひれ振り尾振り跳たぎるらむ

雲のはたてに月没いりて

沼は光の消えにけり

濡しめれる棹を手にすれど

さすは柁たな無なき藻荇舟

月波つげに燃ゆる紅の

八雲やぐらは山の陰かげ毎ごとに

残れる夜の雲染めて



二つの峰は清らなり

堤は低し木は荒し  
西北に亘る山浪の  
黒髪山は誰妻の  
うす絹被く眉にせむ

朝たなびく夏霞  
不二は夏より見ゆるてふ  
沼の半に漂ひて  
霞にさらふ船路かな

菱の實落つる沼なれば  
白羽の鳥も翔るなり  
羨ましきは羽すりて

雌雄共に棲む白鳥よ

船の動くにつと逃げて  
葦間の杙に鳴き交す  
鳥には軽き羽あれば  
さしまねけども寄らずして

憎しとも思ふ浪の上の  
鳥の如くにいたはりし  
人はわが家を去りて後  
寂しき秋となりにけり

朝髪梳る床の上  
眉根粧ふ閨の裡  
袂にくゝる八房の



若紫の色も濃く

雨降る夕、わが前に  
裁縫をすとしていねむりて  
廣くとりたる前髪を  
机にあてゝ壊せしも

頬に突くかゝち、知らぬ間に  
鳴らさむとして覺られて  
笹紅匂ふ唇に  
ふたゝび珠を返せしも

人故妻を逐はれて  
知るは二人の涙のみ  
羨ましきは羽すりて

雌雄共に棲む白鳥よ

美しき物、はなたじと  
握りし鳥は奪はれぬ

人故妻を逐はれて  
さめぬ白日の夢に耄れ  
雲流れ行く東路に  
何しに來ぬるわれならむ

松稀にして榛多き  
常陸は山も高からず  
菱の實おつる沼なれば  
白羽の鳥も翔るなり



ぬなはの若芽搔きよせて  
摘めども船の慰まで

思へば鳥の逐はるゝも  
逐はれて草に隠るゝも  
大路を過ぐる花車  
少女は花の小車か

さす手にひらく春の花  
ひく手に翻る秋の波  
灯影ゆらめく細殿に  
扇翻せし舞姫と――

伊賀より落つる木津川の  
石皆圓き川の上

雪と漲る浪の戸に  
赤裳かゝげて立ちたると――

西京に近き荒寺の  
崩し築土に身を寄せて  
森の公孫樹に落日の  
光に泣きし尼君と――

燈籠舊りし石階を  
鹿に恐れて駈け上り  
紅潮し、頬の色  
花の如くに光りたると――

人は往きけり還りけり  
とゞろと渡る花車



蜘蛛手の道の遠くして  
のこるは暗き花の影

野守の鏡

面錆びて

形象を落とす

雲も無し

還らぬ人の

一人にのみ

神は戀ふるを

許せども

我は勞れし旅人なり

鹿島の海に湧き回る

潮を沖より巻き騰げて

陸に落とせし曉の

風は雲井に潜みたり

蘿纏へる石の門の

碧さを打ちて横さまに

珠の簾と懸りけむ

雨は尾上を遶り行きぬ

砂の上なる塔の

壊るゝ如く壊れては

萱家の村に茂り合へる

栗の大木もあと無く



山凹みぼとに植ゑし銀の  
蕎麥は花こそ名残なれ  
立てる伏したる斜なる  
莖の弱きは摧けつゝ  
葉と葉と摺れて鳴る音に  
口髭反らす地鼠の  
ふくみて穴にひかまくも  
粟殻圃穂は断れて  
額ぬかに渦巻く立髪も  
足しからに絡むしだり尾も  
瀧なす雨に打たれては  
野飼の駒もしをれけむ

霧にしめれる  
雨引あまびきの  
林の奥に  
猿飛びて  
秋は空しき  
山中の  
石の蔭より  
見下ろせば  
筑波の山を  
揺がせし  
雨と風とに  
逆らひて  
枯れける草か  
野の西に



日は力無く

落つれども

眞青なる空に

雲絶えて

峯も麓も

しづかなる

山の上行く

我れなれば

大空に在るに

似たる哉

路は雲母の

石の路

濡れたる玉を

踏み裂くみ

行けども家の

遠くして

我は勞れし

旅人なり

### 山岳雜詩

伊良子清白

行者烏水は山博士  
都出づれば秋風の  
信飛の境に雪を啣み  
水晶の骨齋らしぬ

即ち彼の手に編める  
年のはじめの此巻よ  
興獲て茲に題は成る  
卓上の山高からず



顔蒼白き若者に

秘める不思議さかばやと

村人数多來れども

彼はさびしく笑ふのみ

前の日村を立出で、

仙者が嶽に登りしが

恐怖を抱くものゝごと

山の景色を語らはず

傳へ聞くらく、此河の

きはまる所瀧ありて

其れより奥に入るものは

必ず山の祟あり

蝦蟇、氣を吹いて立曇る

篠竹原を分け行けば

冷えし掌あらはれて

頂に顔に觸るゝとぞ

陽炎高さ二萬尺

黄山、赤山、黒山の

劍を植ゑたる頂に

秘密の主は宿るなり

盆の一日は暮れはて、

淋しき雨と成りにけり

怪しく光りし若者の

眼の色は冴え行きぬ



劉邦未だ若うして  
谷路の底に蛇を斬りつ  
而うして彼れ漢王の  
位をつひに贏ち獲たり

この子も非凡、山の氣に  
中たりて床に隠れども  
禁を守りて愚鈍者に  
鬼の語を語らはず

山頂

雷棲める八重雲の  
底や、下つ界人の國  
雪の生絹によそはれて

彼れに聳ゆる高御座

休まず眠らず疲れざる  
嵐に巖は削られて  
丈なす氷柱きららかに  
卯の花おどし甲ひたり

大空渡る巖山の  
夢の圈をかけいでし  
底津岩根もどよもさん  
猛き姿の瀧津瀬よ

夜なく、星は美しき  
花のたまきを作るらん  
たぐりもよせん天の帳



我手の骨の晶らかに

浮霧深く立つまゝに

山の荒魂あらはれて

同じ姿のおぼろく

かつ手をとりにあそぶかな

たちまち日影かゞやきて

山ほがらにはれわたり

削氷なせる綿雲の

漂ふ限り和らかに

海の底ひにつり鐘の

沈める影を見るごとく

はるかか谷に横はる

杉の木叢のたゞ黒く

振放け見れば白妙の

塔高くあらはれて

西に東に群山の

争ひ立てる姿かな

あゝわが魂の漲るを

誰れかとゞむる力ある

年経る龍よ我が友よ

しばし谷間に眠れかし

時来て天に登らんに

われもむくろをぬけいで

いみじき歌をうたひつゝ



なれが背そがらに騎り行かむ

浅間の烟(七首)

置く霜早き信濃路の  
關より西は紅葉して  
秋か、御空の鮮かに  
煙いろ濃き浅間山

低く連る唐松の  
梢に暮の日はさして  
斜におつる雁金の  
翅をこゆる野路の風  
木賊刈る子が行難たがひむ

蓼科山は青くして  
佐久の平に伏ふしたる  
八十の里わは霞みたり

○

月の世遠き譚

雲の杵搗く碓氷ねの  
紅葉折る日となりぬれば  
秋のみぞれの降りやまぬ  
醜との國土くもちの早わらびを  
春はもたらす佐久の子等  
八十の日落ちず浅間野の  
石の徑こみちになくらんか



○  
落葉松がくり行く駒の  
嘶く聲も秋にして

岩船山の頂に

一つらかゝる雁の文字

佐久の手見奈が面影は

笠に深みて見えねども

少女さびすと花染の

帯は可憐に結びたり

牧にすさびの草の笛

手綱曳く子が戀と成る

○  
空は清けき秋の風  
浅間のけぶりまた高し

其歌古き追分の

節は清けき露の玉

朝野通へば雲と成り

夕野通へば雨と成る

浅間のけぶり立たぬ目を  
卯の花かげに来ては啼く  
悲しき聲のほととぎす  
山の御魂にあらざるか



○  
富士の女神と神集ひ  
火雨ふらして醜國を  
八百日八百夜と浄めけん  
若き姿の淺間山

○  
佐久の廣野に眠りたる  
千曲少女の面影は  
猛き炎を夢みつゝ  
今も清やかに流れたり

○  
雉子鳴き立つ原中に

○  
淺間の煙仰ぐ時  
草刈る童腫には  
天つ燄や宿るらん

○  
秀才は草にあらはれて  
眞玉ゆらゝに玉ゆらに  
いみじき歌を残すらん  
朝、童は小草蒔る

○  
待路誰の子の眞白玉  
野べに山べにおきわたす  
けぶり朝にたちぬとも  
さもあれ秋は露の秋



隠れてきゆる草水に  
思ひは遠し旅の空  
けぶり夕に立ちぬとも  
さもあれ秋は露の秋

漂 泊

秋風吹いて  
河添の旅籠屋さびし  
哀れなる旅の男は  
夕暮の空を眺めて  
いと低く歌ひはじめぬ  
亡母は  
處女となりて

藤戸に

白き額月に現はれ

亡父は

童子と成りて

圓き肩銀河を渡る

柳渡る

夜の河白く

河越えて煙の小野に

かすかなる笛の音ありて

旅人の胸に觸れたり

故郷の

谷間の歌は

續きつゝ断えつゝ哀し

大空の返響の音と



地の底のうめきの聲と  
交りて調は深し

旅人に

母はやどりぬ

若人に

父は降りり

小野の笛煙の中に

かすかなる節は残りり

旅人は

歌ひ続けぬ

嬰子みどりこの昔にかへり

微笑ほゑみて歌ひつゝあり

まつよひ草

木船和郷

空しき野邊

青葉若葉のそよぎつゝ

涼しき風を送りこし

君がやどりの梨の樹は

一葉もみえずなりにけり

門邊に立ちて眺むれば

天の牧場のしづかにて

羊に似たる白雲は

枝より枝をわたるかな

緑のくさにわきいづる



清き泉をこひしたふ  
弱きけものゝわれは今  
空しき野邊に迷ふなり

宇佐驛路

南の空にそゝりたつ  
由布の高根は遠くして  
光かくるゝ天の戸に  
向うて奔る山のなみ  
待宵草の花は咲けど  
堤に禽の聲もなく  
雲の色さへさびしげに  
枯葉ながるゝ川水や

袂と袂うちすれて  
相乗る人も言葉なく  
夕風さむき冬の日は  
宇佐の渡にくれにけり

無題

星の子が我に與へし  
美酒に口は接けず  
天の香の酔に忘れて  
草の上に流しけり

夕暮の林に立ちて



一人ゆく影も寂しき  
秋の野に日は落ちぬ  
白露は葉に輝けど  
草蔭の花いろ弱き

西風に聲はなくして  
喬き樹の枯れにけり  
蒼穹に残る梢を  
護れるは星の影のみ

黄葉紅葉枝を離れて  
根に歸る小き實は  
柔かき床に眠りて  
春の日の光まつらん

夕暮の林に立ちて  
星の海あふぎみれば  
永遠の岸に寄せくる  
波のちと空に満ちたり

曙 光

天つ使はかへりたり  
草にしたゝる水色の  
朝の空にかけり行く  
光の羽のかろきかな

紅薄き唇に  
若き望は満ちぬらん  
静かに開く牽牛花の



花の杯あふれたり

盡きぬ泉のおもかげを  
人の夕にほのみせて  
天空に出づる星のごと  
稚子の瞳は輝けり

野梅集

葉末露子

笛ふき

櫻はなちるおぼる夜の  
月に背くる編笠あはれ  
あれうら若き笛ふきが  
市にしらぶる肩瘦せて

(八七二)

清みてかなしき歌口に  
籠る恨もさく人なしに

あはれ男子<sup>ますら</sup>たびにねて  
いつを夢路の果とする

こよひわが聴く縁には  
歌へ一ふし心なぐさに

袖にはなちる花のかげ  
いでうらわかき戀の曲

(九七二)

春の夜



ちよね機織る

春のゆふべ

畑のほそみち

過ぎがてに

笛ふきすさぶ

ぬしやたれ

梭の手とめて

ふえきくと

桃のはなさく

窓に倚れば

夕月ほのかに

かげさして

亂れてかゝる

まへがみを

さし櫛とりて

かゝぐれば

姉にも優れる

まなざしや

人影おぼろに

なりゆきて

くれなる匂ふ

頬をふく風

たゆたふ笛の音

夢に似たり

夕の祈



夕暮ひとり戸に立ちて  
み空の星の世をこふる  
わが罪ゆるせあまつ神

人のいのちの春の夜に  
我はつたなき時の子の  
など恥多き世をわぶる

まくらの紙は朽せども  
涙のみをのたゆるまで  
縋りて泣かむ袖もなく

なほすてがての現世うつよに  
光もとめてまよふ子を  
大悲者捨つる罪ありや

すみれ花咲く武藏野に  
深むらさきの裾ひきて  
人ははらから睦るゝを

夏の夜月にはしるして  
人は世がたり興あれば  
尙いねがての聲するに

秋の日落つる栗の實を  
裏の小山にひろふ子も  
かへるは母の袖のかげ  
雪の夜老のふきがたり  
峯の小猿も来て聴けな



孤獨はさむき火影なり

ほかけをぐらき胸の暗  
慰籍もなき世におちて  
人の子時のうらみあり  
夕暮ひとり戸に立ちて  
み空の星の世をこふる  
わが罪ゆるせあまつ神

夢のあとさき

瀧澤秋曉

愛妻を喪ひける友に  
ものゝ本に教へられて  
今様、人の家庭づくり

零露つめたうして  
花くれなるならず

樹木くねらぬ君が園よ  
ありし昔の綾の霞に  
あたら縫とりの虹消えたり  
極樂鳥今もしば鳴くや

せめては孤閨の燈火を挑げよ  
こよひ月あかきに過ぐる  
夜氣重く更闌けて  
小萩が下に哀れ露や溜らむ

あゝ君、わかうど、新らしき鰥居  
ことわりなる悲哀を締めよ



尾羽根の川に蒲はあれども  
ゆく水の逝くは堰さえじ

良妻を得たる友に

浮きたる君にあらざれば

ものめづらしき膝枕

つむりの雲脂にざれかゝる

鬢の香ひは知らずとも

夕風薫る北椽の

安樂椅子に近づけて

所望やすらむ一服の

珈琲碗の服紗さばき

憚るまじな新妻の  
初々しさに籠るなる  
情けと愛を斜視に  
見るをも神の許したり

音に聞えし岳男

飛驒に信濃もさりながら

ことしの夏は家にして

『ひれふる山』を聴けよかし

近く娶らんとする友に

雨露、季に入り

寒巖枯木

春味を帯ぶ



傲睨のまなじり

浮ぶや否や

一點笑迷の氣

惜まず僊客の市現

救ひ得たり半外道の人

兎ても角ても

定は

これより

われ罵らるゝこと少なからむ

行く雲

一色白浪

わが母の弟に、川端彌惣といへる人あり、愛媛に  
奉職して、不平有り、去て和泉に遊び、又志を得ず、  
妻を里にかへし、幼な子をわが母に托み、漂然と  
して故山に辭し、春風花開く三月の頃、單身東京  
に上りてより消息絶えて茲に八年。形見の子は

いくばくもあらでわが家に死せり。されど叔父  
君は知らざるなり。われ等頃日其存亡を明らかに  
せんと思ふと切なり、よりて元の妻なりし人に  
代りてよめる。

たしめるさゝにうかれ女の

膝を枕のざれうたに

かつらをのことはやされし

愛媛の春はかへれども

ちぬの浦わに流れより

あまの小舟の棹とりて

うかびましけむ白波の

行方なきごととなりまして

のこしたまひし思ひ子の  
君なきあとにみまかりて



ながめがちなる月影は  
遠きあたりを照さずか

八重山かすむふるさとを

寢覺の床にしひなば

誰ゆゑやせし此頃の

わが面影かみえなむに

はじめて君に肌ふれし

もとのなさは忘れども

忘れぬ妻がおもひねの

夜半の夢にもおとづれて

劍 光

曉深く山に入りて

久保田山百合

冬木を樵ると斧をあぐれば  
ひらめく光にこゝろさわぎ  
樵夫急ぎて家に歸りぬ

山田の雪に土を求め

血氣の足に麥を踏めば

下蒨の芽に心動きて

壯者<sup>わかもの</sup>急ぎ里に飛びぬ

科野の山の深き谷に

千古しづまる建御名方

あした異靈を里に傳へて

大神早く海を渡りぬ

東の海の王の劍



この時恰も鞘を拂へば  
四千萬人光を望みて  
山川草木渾て城壁

樵夫は斧を庭に擲ち  
一人の妻の幸を祈れり  
農夫手馴れの鋤を舉げて  
残れる子等に家業をさとしぬ

女の胸に涙あるは  
男の腕に劍あると同じ  
曉の灯に衣を縫ひて  
樵夫の妻は旅を思ひぬ

山の氣稟けて山の氣象

幼き者は畠を鋤きて  
家に在らんと門の外に  
農夫の子等は父を祝ひぬ  
諏訪の山風旗を吹いて  
里の四ッ辻酒を置く人  
見つゝ送れば谷の隈々  
ますらたけをの  
行衛知らずも

沈 鐘

山崎紫紅

入目を掩ふ富士ヶ根は  
夕を告ぐる鐘につれ  
頂き染し紫を  
黒き衣につゝみけり



藍を湛へし三日月の  
湖の面は霧立ちて  
桂に落つる瀬の音は  
晝さへ遠く響くらん

峯の嵐に誘はれて  
水のまに／＼流れゆく  
落葉は高さ岩の上の  
十尋の瀧にかゝりたり

玉簪花に白き裾野より  
檜の匂ふ鐘が淵  
卷柏茂る水際は  
壺の深さを思ふのみ

月諸共に立出でし  
我家は雲を隔てたり  
葉末の露を伴として  
ひとり茲までしのびしが

そのかみ降りし熔岩も  
水濕へば苔づきて  
なめらかにこそなるものを  
情人の心もなにとてか

思ひぞ出づる去年の春  
鶺鴒の島まうで川口の  
共に一葉の舟の中  
棹こそ知らめひめ言を



親の許さぬ語合を  
變るまじとの誓言に  
神惱ませし報かや  
秋は扇の骨ばなれ

富士の煙の立たずして  
淺間に燃ゆるたゝずまひ  
昔は今にかへらざる  
悶を誰にかたらめや

あゝうらわかき新妻の  
濃紫こむらさきの色に代へられし  
恨みは深きこの淵の  
鐘ひきあげて打つととも

髪は詛の蛇の  
逆立浪に寄りみれば  
かはり果たる顔の  
影耻かしき月のてり  
鬼とやならん橋姫の  
恨みを君に返しなば  
彼世の縁はうたかたの  
泡と消るがかなしくて

人の香遠き辭はことばにて  
語らふ夜半の重なれば  
鴛鴦を契よと  
互の耳にさゝやきし



浪よせ騒ぐ彼岩に

あぢておのゝく手を取りて

こゝの昔を語部の

共に眺めし月もあり

さらでも淋し秋のくれ

ひとり聞く夜は松蟲の

名をさへ恨むはかなさや

いざ我里にかへらんか

裾野は廣し女郎花

桔梗は野邊をかざれども

君と語りし岩の上は

世に何よりもなつかしき

消えては結ぶうたかたの

水の行衛をしのぶれば

月の光の強くして

あれ鐘のありくと

語りつぎ名にのみ聞きし

有難き鐘拜むかな

杯の空を仰ぎて

行く水を湛へにけりな

水ならぬ轟の鳴りは

動めくにその音すか

つく息は沫となりつ

照りまさる鏡の光



淀みたる河の縁は  
鐘口に渦を造りつ  
うづまきて水上に穴し  
忽ちに水嵩うせたり

自ら熊笹の根の  
ぬけいで、淵へはしれば  
稻妻の鬼一口と  
吸入るゝ響は高し

瀧かゝる十尋の岩も  
筐なる千曳の石も  
動きいで穴門あなとに入れば  
地消えて霧掩ふ月

うつくしやかのかのつく息の  
虹となり空に橋せし  
渡殿の虹をやふみて  
我もまた鐘に入らんか

雲よ我が道しるべせよ  
虹の橋あやうきに  
月よなれ行く道に照れ  
虹の橋の細さに

あらはなる眞白き脛の  
鐘の門にかくると見れば  
烏羽玉のかのくろかみは  
あと引きて姿はうせぬ



夏を懐ふ

清水橋村

まづ寂びそむる夏の野の  
檐の林の月微く  
影ほのかなる秋花や  
草の鶉の音を遠み  
薄霧迷ふこの夕  
あゝほろ／＼と散る露の  
さびしき響墮ちてける  
百葉のすゑの西風に  
秋の來ると知られたり  
手枕さむき石踏の  
夢杳かなる巴川  
北浦あたり旅寐して

心驚く淺茅生の  
小草が陰を宿とせば  
うすき羽袖の蟋蟀  
歌うてめぐる寂寥の  
沈む憂に死ぬばかり  
思ひぬる夜の月落ちて  
闇としなれば蘭菊の  
小隠いづる野狐か  
細く聞ゆる涙聲

酒沼は遠し橋の  
畑より覺めて朝の道  
逍遙ひくれば繪のごとく  
野べも林も初秋の  
秋の光景とかはりつゝ



鶴鷓野の澤の水白く  
蓼の葉かげに紅の  
袂をぬらし泣く蟲の  
蜻蛉に重き朝の露  
百合の散れるも哀れなり

日の影寒し蟲の音の  
繁さが草に流れ入り  
白帆を照らす松葉川  
ゆるき流の波の穂に  
小さき龍ぞ跳るなる  
柳のかげの草堤  
小舟を呼べば河風に  
聲澄みわたる空のさま  
秋の鏡ぞみがけたれ

松原遠み樹のまより  
連なり亘る雲の根の  
筑波は低くうづもれし  
山川深き夏草の  
しをるゝ白き天の日や  
光を閉す大空の  
雲の青葉も散り行けば  
藝術の花の星もまた  
さやかに照らす銀河  
七夕の瀬もすぎにけむ  
夏残りなく雨降りて  
緑をかへす黄のいろい

夕風すゝし手弱女が



涼み語らふ川添の  
樓の燈火かけ落す  
春より深きふか緑  
水のさゝめく私語の  
流にまかす浮草や  
瑠璃なす髪からすばの鳥羽の  
黒き油の一雫  
夫れ螢火とうまれいて  
夏また戀の文ふみをしも  
照らす光のその影も  
涙し見れば春べより  
更に悲しき人心  
あゝ夏の戀なつの戀  
春より高さその情こころ

春より深きその想おもひ  
春の紫さくら草  
これを乙女が戀とせば  
夏の夕の緑かけ  
月に歌はんころこそ  
人のまことの戀ならむ  
蜩鳴ひぐらしきてかたへより  
静かにくれて鄙の里  
この夜は清し若人の  
歌もさこえて驛うまやぢや  
古道の町も一卷ひとまきの  
繪にも入れなむ松並木  
晝ひるは荷馬の嘶なげの  
風に響くや市山の



藁屋は青き屋根の草

菖蒲ぞ虹の使なる

白雨かゝる夏の日の

追懐多き夢枕

今朝巖陰を立ちいでし

訪ねて山に来てみれば

秋はきにけり桐一葉

旅の衣の破れはてし

心にたへぬ春秋や

あゝわが友の夏の君

君が姿をたとふれば

げにや二つの軍陣の

闘ふがごとくごと

馳せちる雲の武士の

日は投げかくる白き矢に

燃けよと地を射ればまた

地よりは水の霧を吹き

消えよと天に騰る楯

雲のいろく葉の茂み

かけへだてたる天地の

競争高く観るときは

人實動の姿なる

かしこき神の藝術こそ

ぎても見るその啓示

天の青葉の雲の影

地の緑葉のふかきより

彼と是れとの白絲の



光をつなぐ雲の峰  
車駕めぐらす曦の神の  
鑿の力の鋭さに  
奇蹟つむなり夏の山

杣人は斧の手をとどめ  
馬子は手綱をゆるめつゝ  
歸る白帆の漁夫は  
風風ぐ海に棧け橋に  
小川に谷にふり仰ぎ  
讃ゆる聲も低からず  
心に結ぶ宗や無き  
恐れを抱く人の子の  
のがるゝ蘆の湖や

更にも遠き北の海  
千島が極にあらねども  
秋は侘しき閑居山  
登りて峰に來てみれば  
禪定の寺の夕まぐれ  
鐘の音にや愕かむ

初霜降りて野は白く  
草の生命も消えてゆく  
夜ともなるは知らずして  
隴ならびよき麥の秋  
日盛る畠に飛ぶ蟲の  
翅輕くも現はれて  
農夫が夢をかすめけむ  
夏をし見つる旅人の



かへさ友なき夕まぐれ  
老人の境に入りそむる  
田の面の秋をめぐりつゝ  
求むる夏の姿かな

あな哀れなり雲間より  
天馬の翔る天地の  
高き情の壯年か  
味ある秋や彫みけむ  
風の息吹の激しさも  
寂しき山にのがれ入り  
露分衣被ぎたる  
今朝の眺めの侘しけれ

燃ゆる野草の

花にゆき

七尺裸形の

夏の神

劍振りたる

莊嚴は

靄にかくれぬ

若人よ

追へく天の

力ある

雲の姿を

失はゞ

迷ひも入らむ

秋の野の

草亂れたる

宮の路



湖上曲

大倉桃郎

八里の山路こえくれば  
雲井に入るかたまくしげ  
はこねの山のいたゞきや  
伊豆とさがみの國境

あめつちとほく立ち分れ  
この世はじめてなりしとき  
ちよろづがみの神集ひ  
たへのすがたをうつすとて

鏡と水をたゝへけむ

千歳つさず漫々と  
底ひは深し人の世に  
あしのうみこそ残りたれ

森の下蔭水の際  
天の戸とほく見上れば  
天津少女やいつの世に  
すがたをかくは變へにけむ

衣手すゞしあづま路の  
ぬぐへる如き碧空に  
一ひら雲のとぶところ  
きよくけだかくそばだちて

一万二千四百尺



名にこそおへれふじの山  
たびのやどりのおばしまに  
よりてひそかに見下せば

神の前には笑みやせん

いく年月かよそほひを

こらしやしけむみづらみに

影こそうつせさかしまに

すぎゆく人よこゝろして

いたくな呼びそ山の名を

そばだつかたちかくろひて

影はづかしと消えやせん

見よぬぎすてし衣きれて

しのゝめ遠く別れては  
入日にはゆるさまぐの  
色ある雲とかはりたる

二

われ人の世に生れ来て

そのひとひらに通路の

かけはしなさんすべもなく

たゞ目もはるに仰ぐかな

はるく來にしたびごろも

ときてたのしき朝夕を

一葉の舟にかいとりて

底ゆく雲を追ひぬれば



打ち開けたる山よ水  
いさごはきよし兩岸の  
つゝじは咲けりうき島の  
色こそことにわすられね

よべは五絃の月ふけて  
夜露に袖をうたせしが  
あし蹈みわけて今日もまた  
しほならぬ海にあこがれて

夕風西にそよぐころ  
世を塵と見しひじりさへ  
夏艸のうへしばしばも  
衣の袖をかけぬるを

十年はこゝにゆきかひの  
嶮岨をなれし馬追ひも  
菅の小笠をかたむけて  
つな曳く手さへわするゝを

うるはしきかな夕やけの  
やゝきえながらおちてゆく  
林にすぎしかゞやきの  
小笠の上にもすれつゝ

あやおる如き水の上に  
くれなるながすいろどりも  
さびしき色と變りては  
日はおちてけり甲斐の山



神の灯ともす燈籠や  
鳥居の森のくさむらも  
夜をまつ蟲のかすかにて  
小雀やどる夕まぐれ  
湖水をめぐるなつ山の  
遠き近きをさまざまに  
紫うすくにじみては  
はこねの驛はしづかなる

三

あれあれすべてものゝねの  
み寺の鐘ともろともに  
しづまんとする水の上に

今きえかゝるふじの影

かへりをいそぐ渡し舟の  
かいのしづくはみだされて  
そことも知らずゆらめけば  
むなしくめぐるうす煙

青葉にとざす一里は  
山ほとゝぎすなきすぎて  
若葉はけぶる岨路に  
たが清き聲歌きえて

昨夜三島にかりの夢  
あかつきあきのにぼりけむ  
旅人今ぞやどるなる



あしたの空もはるゝらむ

すべてみちたる夜の色

蒼茫かぎりはてもなく

み空の下は山脈と

のこれり我とあしの海

西にほのめく明星の

人の世ちかく下りきて

後歌よまん幼子の

生るゝ宵はかゝるらむ

黒髪長きたわやめの

伏家の母にやどらむは

かゝるときにやあるらむか

ことさら清き今宵なり

あゝ暮の色あしのうみ

### 落葉を掃ふ歌

簾まの雲の歸り來て

時雨、廂にかゝるとき

ゆふべ燈火の影ゆれて

板戸にふるゝ音をさく

戸隙をもるゝ日の光に

朝の雨戸をくりてみれば

こは狼藉たり庭もせに

落葉散葉のうづだかく

たとへば稚兒の戯れに

西川虹川



花草摘みて捨つるやう  
森の女神の舞ひいで、  
夜の遊びにすさみしが

残んの秋を誇りたる  
櫻の霜葉地に朽ち  
池をめぐらふ葉柳の  
枝のみ細く映りたり

今、手にしたる箒もて  
樹間をはきて清むれば  
朽葉の音の颯々と  
寥しさそゞろ胸に染む

落葉よ舞へよ山風の

威ある力に敗れたる  
雲のとばりの故郷の  
園生はとはに緑なり

かのみあかしの灯をかりて  
丘なす黄葉につたふれば  
白き煙の森を縫ひて  
天の高さに漲れり

水は流れて海に落ち  
烟は空に立ちのぼる  
原始にしてまた永久き  
神は万象を造りたり



逍 遙

澤田東水

やゝ暮れて行く蟬の聲  
されども今日の蒸暑さ  
扇の妻も風呼ばず  
狭き書齋は汗多き

かくて逍遙ふ沼の岸  
白き花藻の蔭見れば  
泳ぐよ小鮒、浮き沈み  
こゝには微風そよめきて

若蘆わかあし繁き彼方より  
むしろの帆さへ掛添へし  
菱取船は漕ぎ歸り

はたと鳴止む行々子

折しも響く暮の鐘  
一つ／＼に消行きて  
薄靄こむる水の上  
夕月淡く影映す

それ徒に人の跡  
踏みてたどりて急ぐべく  
餘りあるかの吾なれば  
沼の邊は静穩しづかにて

雲の扉

坂東自適

八雲いざよふおばしまに  
夕暮ひとりよりそひて



少女のかざす白百合や  
七つの星はきらめけり

薔薇の香ときめきて  
文ある衣の袖長く  
丈なす髪は背に垂れて  
黄金の色に漂ふを

誰が閉ざしけむ大宮の  
雲の扉のあかくと  
輝く空を見上れば

夕日は海に入らんとす  
みはしをめぐる新潮は  
晝と夜とをかぎれども

常珍らしき姫君の  
かざしの百合は白うして

戀の甘酒愛のかめ  
雫は終に絶えせねば  
ほのかに酔へる人の子の  
若かる胸はゆらぐらむ

山よりかけて海の上に  
流れも入るか天の川  
浪に浸りし星ならで  
少女のまみの澄めるかな

光は遠にをさまりて  
風静なる夕月夜



帳を漏るゝ琴のねは  
陸より海につたはりて

(白きを耻づるたゝむきを  
かたみに組まん夜もがな  
漣ぬるき温泉の水に  
共に沈まん夜もがな)

橄欖オリーブの林枝古りて  
羽を休むる白鳩の  
ねに鳴く聲は傷を負へる  
わが胸にこそひゞき來れ  
み手にやどらば鳥と共に  
君慰むるうたはあれど

心寂しや姫君は  
ひとり宮居をしめませり

窓にゆらめく灯は  
はしき面てわを光らすらん  
海に落ちたる紅の  
名残の雲はうすらぎぬ

(あはれ地にある夕ぐれは  
聖き祈に送らまし  
あのづと落つる曉の  
涙は神よ許せかし)

篝 火

吾にもありし戀人の

近藤野水



ありとはせねど表はれて  
嘆きわびぬる初戀の  
心も可愛し妹の

湯あがり姿しどけなく  
やさしき胸の傍ほとより  
小さき乳房のほの見えて  
黄楊の小櫛のたゞひとつ  
ま黒き髪にかざれつ  
やゝやつれにし係に  
そめにし色ぞにほはしき

浴衣の袖にたはれては  
秋かぜ通ふ欄干に  
月の光もすゞしきを

折から様も似通へば

今日しもよみしわが物語ふの  
『篝火』の巻思ひで、  
女の君のつゝましき  
さては源氏のおん様に  
微笑ほまれつゝ『篝火』に  
立つちふ戀の烟こそと  
低き聲してさゝやけば  
ありともしらぬ微音にて  
『世にはたえせぬ燼なりけり』と  
はぢらふ様に微笑みつ

燈火とほくしぞけては  
月にまかせる涼み臺



亂れし髪をさりげなく  
背ける人のかきあぐる

落日

山内冬比古

かすかに雲は光れども  
麓をめぐり野に匂ふ  
なごりの色の消えゆけば  
森に岡邊に死の影の  
はげしき風のすさぶかな

花もうなだれ飛ぶ蟲も  
翅やすむる白露に  
其夜の夢や寒からん  
一重の暗にとざられて  
など落日の力なき

響寂しき夕潮よ  
最終の浪よひそやかに  
珊瑚の床にかへれかし

野路にかすめる旅人よ  
やがて逝くべき夕陽の  
つめたき風に道くれて  
春の衫やつらからん  
夕の神のさゝやきに  
とく花蔭にねむれかし

あゝ火の車きしりゆく  
深きは、暗の淵にこそ  
平和の星や輝かん  
落ちゆく光潮の音



我が悲みと涙とを  
葬らずやはかの淵に

木の花、草の花

河井醉茗

さくら

春風一夜、二十四の

花の苔を吹き開き

朝、櫻のかゞやきに

人は驚くみやこ哉

煤の烟に町妻の

襟の白きはあかじめど

咲いて櫻の白かるは

山なる木にも耻ぢざらむ

櫻の盛り、世の盛り

都は人の盛りにて

天才、地才、網を解き

時の潮に乗らんとす

雲に浮べる春光の

金鞭あげて駈り來る

駒の響きに地なる花

櫻、連翹、あわたし

人酔はしむる歡樂の

樂は櫻に埋もれて

捧げ出でたる春姫の

香の甕は今か満つらむ



さくら草

人の子ならばさくら子と  
名づけまほしき櫻草  
形ち優しく匂ひ出で  
我繪心を動かしぬ

未だいわけなき五つ子の  
七つに變り九つに  
變る姿も處女なれば  
美しかれと祈るかな

春に生まれし妹の  
よわくしげに地を歩む  
草の若葉の幼だち

花になる日や遠からむ

石にな觸れそ火にな寄りそ  
刺ある枝は傷けむ  
女の子ある家にして  
いたはり育つ櫻草

撫子

觸れて崩るゝ砂岩に  
根を傳はせて撫子の  
水、うるほひは乏しけど  
花は自然の色に出づ

山ふところの日に遅き



草の陰なる草の花

よわく小さくわけもなき

一重撫子、眼に止る

深山ならぬ山と云へ

海拔凡幾千尺

只一くきの草にすら

高さ力はこもりつゝ

連翹

山を下りし仙媛の

山に歸らず里に居て

氣高きふりか連翹の

花は古めく黄色なり

たけ高からず枝垂れて

花の小禽の見えかくれ

對ひてあれば親みの

離れ難なき連翹の花



櫻井 謙吉 著  
藤田 正 著  
藤田 正 著  
藤田 正 著  
藤田 正 著  
藤田 正 著  
藤田 正 著  
藤田 正 著  
藤田 正 著  
藤田 正 著

丁  
五

明治三十八年六月九日印刷

明治三十八年六月十二日發行

青 澤  
(定價金四拾錢)

編輯者 河井幸三郎

發行者 山縣操  
東京市本郷區駒込四片町十番地

印刷者 青木弘  
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舍第一工場  
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所 東京市本郷區駒込四片町十番地  
内外出版協會

電話下谷二千四百五十三番





平木白星詩集

# 日本國歌

（再版 \* 定價金拾錢 \* 郵稅四錢）

詩人白星の詩は花鳥風月戀無常を吟咏する類にあらずして、彼の謂ふ所は平和なる人類主義也、世界的國家の建設也、神と人間との融合也、江湖の諸賢、冀くは現世の警醒として、慰籍として、將た未來の預言として、一讀一唱の榮を賜はらんことを。

## 東京日々新聞評

新詩壇の秀才として知られたる平木白星氏の著にして、日本國歌、亞細亞、フランチェスカ、オフェリア、ロウレライ、ヴィクトリア、アギナルド、西伯利亞、關のうちに、全地球圖を展べて等二十二篇の新體詩を集めたり。氏の想の大膽的にして、調に於ても徒に他の詩人が女々しき涙に暮るゝが如きものにあらず、氣滿ち志高く一誦霸氣の生じ來るを覺ゆ。

▲口繪石版十五度刷

▲製本總クロース金銀模樣入

### 美術新報

本書は水彩畫の妙を以て聞ゆるの榮の十六版を出すにあたり、更に力をこめて訂正し、之が題號を改めたるものにして、専ら少年初學の爲めに寫生の準備、寫生の方法、彩料の説明、著色につき著者の經驗、學理上色彩の定義、模様畫に於ける色彩の應用、質問につきての數綱に分ち、更に細目を立てて綴々詳述する所あり、又著者の筆に、丁寧親切を極めたるものば、實に初心者のみならず、之に志あるもの、是非一顧を要する好書なりといふを憚らざるなり。

### 日本人

著者が斯道の能手たるは人多く知アマチュアを裨益する所多かりしかば、これまた世の多く知る所、其後再び海外に遊び、大に研究發見する所ありて別に此記述の用意周到を極めて、寫生の準備より始めて、解説丁寧、一般のことは網羅して遺さず、殊に質問に對して説明の勞を執らんと云ふ如き、其忠實の意を多とすべし。

▲質問自由

著者は本書讀者の質問に對して應答の勞を辭せず

大下藤次郎著

# 水彩畫階梯

（再版 \* 定價金拾五錢 \* 郵稅四錢）



定價一冊金拾五錢  
八冊金拾圓  
拾冊金拾五圓  
前四冊金壹圓  
前六冊金壹圓

月刊

# 文庫

文學雜誌

一ヶ年(定期) 四冊共  
増刊(四冊共) 一圓八錢  
前金貳圓  
郵税一錢  
見本郵券十錢

文庫は明治二十二年の創刊にして隆替常なき文學雜誌中最堅固に發行部數最多く讀書社會に最勢力を有す近來本誌の雄風を羨みて模倣するもの相を知らむに本誌の特色は虚名なくして實力あるに在り凡そ新文士を待き集むるに在り最公平なるは本誌に若くはなく趣味の清新材料の豊富亦竊に自ら許す所その微細尾介を以て自ら任じ未だ曾て渝らざること十年一日の如くなるは明治文壇空前の事業にして又本誌の獨壇世の名を青年雜誌に假託して事實は却て之と表裏するものと自ら其撰を異にするを確信す天下の俊髦冀くは競ふて趨り來り本誌の微志を成さしめよ

## 寄稿略則

記事政治に渉るもの若しくは風俗を擾亂するの虞あるものは採らざ  
未完の原稿は大抵採ることなかるべし字體亂雜のもの亦然り  
原稿の字數は一行二十字詩用紙は半紙大に限らるべし  
原稿には毎篇必ず住所姓名等を附記せられたし但紙上には匿名又は變名にて出すも差支なし  
文章詩歌俳句等種類を異にするものは各別の紙を用ひらるべし文章は篇を異にする毎に用紙を新にせらるべし  
原稿紙中に用事の文句を認むるは妙ならず  
原稿返却の請求に應ぜず郵税先拂又は不足のものは一切請取らず



13  
12